

泉南市遺跡群発掘調査報告書 XXVII

泉南市文化財調査報告書 第五〇集

2010. 3

泉南市教育委員会

『泉南市遺跡群発掘調査報告書XXVII』正誤表

訂正箇所	誤	正
目次	第2章第7節 08-9区の調査	第2章第7節 08-8区の調査
挿図目次	第8図 男里遺跡08-9区地形図	第8図 男里遺跡08-8区地形図
図版目次	PL. 10 男里遺跡09-4・5・08-9区	PL. 10 男里遺跡09-4・5・08-8区
P. 3 第2表 6行3列目	08-9区	08-8区
P. 6 第1図 図中キャプション	ON08-9区	ON08-8区
P. 8 第3図 図中キャプション	5 ON08-9区	5 ON08-8区
P. 12 1行目	第7節 08-9区の調査	第7節 08-8区の調査
PL. 4 図中キャプション	ON08-9区断面図	ON08-8区断面図
PL. 10 タイトル	男里遺跡09-4・5・08-9区	男里遺跡09-4・5・08-8区
PL. 10 写真キャプション	ON08-9区	ON08-8区
巻末 報告書抄録 12行7列目	08-9 200903	08-8 200903
巻末 報告書抄録 24行1列目	男里遺跡 08-9	男里遺跡 08-8

2010.3 泉南市教育委員会

序 文

泉南市は、古代からの行政区画であります「和泉国」の中でも南部の日根郡に位置しています。一年を通じて温暖な気候と海山に囲まれた豊かな自然環境により、市内には先人たちの営みによって残された数多くの遺跡が存在していますが、近年の都市化に伴いその姿を大きく変化させ、過去の文化を現代に生きる我々に見えにくいものとしてしまいました。埋蔵文化財の発掘調査は、まさにこれら先人の残した文化を現代によみがえらせる方法のひとつといえます。

本市では、先人の残した文化を後世に伝え、現代のわれわれが継承していくという責務を果たすため、発掘調査を行い、本報告書によりいち早く成果を公表させて頂いております。本書により、最新調査データを知って頂くと同時に、そこから垣間見る先人の残した文化や歴史を感じて頂ければ幸いと存じます。

また、本年は史跡海会寺跡広場オープンから15年という記念の年となっており、隣接いたします埋蔵文化財センターと一体により一層充実した文化財保護行政を推進して参りたいと思います。

最後になりましたが、調査にご協力頂きました地元土地所有者、近隣住民の皆様、並びに関係諸機関の方々には、深く感謝の意を述べさせていただきますと同時に、今後とも本市の文化財行政により一層のご理解、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成22年3月

泉南市教育委員会
教育長 梶本 邦光

例 言

1. 本書は、泉南市教育委員会が平成 21 年度国庫補助事業として計画し、生涯学習課が実施した泉南市遺跡群の緊急発掘調査事業の報告書である。
2. 調査は、泉南市教育委員会生涯学習課、石橋広和、岡 一彦、城野博文を担当者とし、平成 21 年 4 月 1 日に着手し、平成 22 年 3 月 31 日に終了した。なお、本書に掲載している内容は、平成 21 年 1 月 1 日から平成 21 年 12 月 31 日までのものである。
3. 現地調査および整理の実施にあたっては蒲生徹幸、蔵田弘幸、藤野 渉、真鍋紀美子諸君らの協力を得た。
4. 本書の執筆は第 1 章を石橋が、第 2 章第 6 節ならびに第 6 章第 3、4 節を岡が行い、その他の執筆および編集は城野が行った。
5. 現地調査における写真撮影は各担当者が行い、出土遺物の写真撮影は城野が行った。
6. 調査における出土遺物および図面、写真などの諸記録は、泉南市埋蔵文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを望むものである。

凡 例

1. 各調査区には個別の番号を付した。番号の構成は、「遺跡略称－調査年度－通し番号」である。遺跡略称は、男里遺跡－ON、光平寺跡－KH、幡代遺跡－HT、長山遺跡－NG、坊主池遺跡－BZ、大苗代遺跡－ONS、海宮宮池遺跡－KG、下村遺跡－SM、下村1号墳－SMT－1、新家古墳群－SNT、兎田遺跡－USである。調査年度は西暦の上位2桁を省略して表記している。
2. 図中の方位は、PL. 1・2では真北を、各調査区位置図・地形図では国土座標VI系にもとづく座標北を、各調査区平面図では磁北をあらわしている。
3. 図版中に示したレベル高は、T.P. + (m) の数値を使用しているが、T.P. +は省略している。
4. 本書で扱う地形分類図は、豊田兼典氏が作成した。(PL. 2)
5. 遺構名称は、遺構の種類を表すアルファベットと任意の数列の組合せで表記している。本書にて扱う遺構の種類はPit-ピット、SD-溝である。
6. 遺物実測図の断面は、須恵器－黒塗り、その他－白抜きのように区分している。
7. 遺物実測図と写真図版において遺物番号は統一している。

目 次

第 1 章	調査の経過	1
第 2 章	男里遺跡の調査	
	第 1 節 既往の調査	5
	第 2 節 09-1 区の調査	7
	第 3 節 09-2 区の調査	8
	第 4 節 09-3 区の調査	9
	第 5 節 09-4 区の調査	10
	第 6 節 09-5 区の調査	11
	第 7 節 08-9 区の調査	12
第 3 章	光平寺跡の調査	
	第 1 節 既往の調査	14
	第 2 節 09-1 区の調査	14
第 4 章	幡代遺跡の調査	
	第 1 節 既往の調査	16
	第 2 節 09-1 区の調査	16
第 5 章	長山遺跡の調査	
	第 1 節 既往の調査	18
	第 2 節 08-1 区の調査	18
第 6 章	坊主池遺跡の調査	
	第 1 節 既往の調査	19
	第 2 節 09-1 区の調査	19
	第 3 節 09-2 区の調査	20
	第 4 節 09-3 区の調査	20
第 7 章	大苗代遺跡の調査	
	第 1 節 既往の調査	22
	第 2 節 09-1 区の調査	22
第 8 章	海宮宮池遺跡の調査	
	第 1 節 既往の調査	24
	第 2 節 09-1 区の調査	24
第 9 章	下村遺跡の調査	
	第 1 節 既往の調査	25
	第 2 節 09-1 区の調査	25
第 10 章	下村 1 号墳の調査	
	第 1 節 既往の調査	27
	第 2 節 09-1 区の調査	27

第 11 章	新家古墳群の調査	
第 1 節	既往の調査	29
第 2 節	09-1 区の調査	30
第 12 章	兔田遺跡の調査	
第 1 節	既往の調査	32
第 2 節	09-1 区の調査	32
第 3 節	08-1 区の調査	33
第 13 章	まとめ	34
報告書抄録		巻 末

挿 図 目 次

第 1 図	男里遺跡、光平寺跡、幡代遺跡、長山遺跡調査区位置図	6
第 2 図	男里遺跡 09-1 区地形図	7
第 3 図	男里遺跡、光平寺跡出土遺物	8
第 4 図	男里遺跡 09-2 区地形図	9
第 5 図	男里遺跡 09-3 区地形図	10
第 6 図	男里遺跡 09-4 区地形図	10
第 7 図	男里遺跡 09-5 区地形図	11
第 8 図	男里遺跡 08-9 区地形図	12
第 9 図	光平寺跡 09-1 区地形図	14
第 10 図	幡代遺跡 09-1 区地形図	16
第 11 図	長山遺跡 08-1 区地形図	18
第 12 図	坊主池遺跡、大苗代遺跡、海営宮池遺跡調査区位置図	19
第 13 図	坊主池遺跡 09-1、2、3 区地形図	20
第 14 図	大苗代遺跡 09-1 区地形図	22
第 15 図	海営宮池遺跡 09-1 区地形図	24
第 16 図	下村遺跡、下村 1 号墳、新家古墳群、兔田遺跡調査区位置図	25
第 17 図	下村遺跡 09-1 区地形図	26
第 18 図	下村 1 号墳 09-1 区地形図	27
第 19 図	新家古墳群 09-1 区地形図	29
第 20 図	新家古墳群出土遺物	31
第 21 図	兔田遺跡 09-1 区地形図	32
第 22 図	兔田遺跡 08-1 区地形図	33

表 目 次

第 1 表	平成 21 年発掘および試掘調査届出一覧表	2
第 2 表	発掘調査一覧表	3
第 3 表	試掘調査一覧表	4
第 4 表	立会調査一覧表	4
第 5 表	文化財一覧表	36

図 版 目 次

PL. 1	泉南地域の文化財
PL. 2	泉南地域の地形分類
PL. 3	男里遺跡調査区①
PL. 4	男里遺跡②、光平寺跡、幡代遺跡、長山遺跡調査区
PL. 5	坊主池遺跡、大苗代遺跡、海宮宮池遺跡、下村遺跡、下村 1 号墳、兎田遺跡調査区
PL. 6	新家古墳群調査区
PL. 7	男里遺跡 09-1 区①
PL. 8	男里遺跡 09-1 区②
PL. 9	男里遺跡 09-2・3 区
PL. 10	男里遺跡 09-4・5・08-9 区
PL. 11	光平寺跡 09-1 区、幡代遺跡 09-1 区、長山遺跡 08-1 区
PL. 12	坊主池遺跡 09-1・2・3 区
PL. 13	大苗代遺跡 09-1 区、海宮宮池遺跡 09-1 区、下村遺跡 09-1 区
PL. 14	下村 1 号墳 09-1 区、新家古墳群 09-1 区①
PL. 15	新家古墳群 09-1 区②、兎田遺跡 09-1・08-1 区
PL. 16	出土遺物

泉南市遺跡群発掘調査報告書XXVII

第1章 調査の経過

平成21年における土木工事に伴う届出件数の状況は、第1表のとおりである。経済情勢を反映してか昨年度後半から件数は減少したが、今年度においては、試掘は若干減少しているものの発掘においては増加している。これは比較的規模の大きな開発が減少したものの個人住宅等の着工が増加しているためであり、来年度以降もこの傾向は続く可能性がある。

このような状況のもと第2・3表のとおり調査が行われた。本書で報告するのは11遺跡、19調査区である。また、このうち3遺跡、3調査区については平成20年度未報告分を掲載している。それぞれの遺跡について調査の経過を述べたい。

男里遺跡は、現在の男里地区の他、馬場・樽井・幡代地区にもまたがる市域最大の遺跡であり、毎年届出件数、調査件数ともに最多である。近年、男里集落内の調査は減少傾向にある反面、遺跡東または北東部の馬場、樽井地区の調査が増加している。さらに今年度は、幡代地区に含まれる地域をあわせて5件の調査が行われ、昨年度未報告の1件の調査を併せて報告している。

光平寺跡は、現在の男里集落の中心に位置し、寺跡の推定範囲のすべてが男里遺跡にも含まれ、寺院に関連する遺構・遺物がある程度見つかっている。今年度は寺域推定地の北側部分で1件の調査が行われた。

幡代遺跡は、金熊寺川右岸の現在の幡代集落を中心とする遺跡である。集落内の調査は着実に進行しており、今年度は集落東端で1件の調査が行われた。

長山遺跡は、南北に細長い遺跡である。立地から開発は少ないが個人住宅に伴う調査はある程度行われている。今年度は昨年度未報告の現馬場集落南東縁辺部分の調査1件を報告している。

坊主池遺跡は、分布調査で散布地として周知された遺跡である。小規模な遺跡ながら今年度は3件の調査が集中することとなった。

大苗代遺跡は、共同住宅建設に伴う試掘調査で発見された遺跡である。近年は個人住宅に伴う調査が着実に進んでいる。今年度は、個人住宅に伴う調査1件を報告している。

海宮宮池遺跡は、海宮宮池北西部分から堤体を中心とする遺跡である。今年度は北側堤体上の部分で1件の調査が行われた。

下村遺跡は、分布調査で発見され、その後の調査で弥生中期の集落も確認されている。今年度は現在の下村集落内で初めて1件の調査が行われた。

下村1号墳は、横穴式石室を持つ円墳であったとされているが、現在は削平されていると考えられる。今年度は市教育委員会による初めてとなる1件の調査が行われた。

新家古墳群は、樫井川左岸丘陵上に細長く展開する古墳群であるが、一部を除いてほとんどが削平されている。今年度は北側の丘陵先端部で1件の調査が行われた。

兎田遺跡は、現兎田集落とほぼ重複しているため個人住宅に伴う調査が中心であるが、ほぼ毎年行われている。今年度も集落内で昨年度未報告分1件を含め2件の調査を報告している。

第 1 表 平成 21 年発掘および試掘調査届出一覧表

平成 21 年 12 月 31 日現在

年 月	発 掘		試 掘		合 計	
	件 数	面積 (㎡)	件 数	面積 (㎡)	件 数	面積 (㎡)
21 年 1 月	2	556.76	0	0.00	2	556.76
2 月	2	15,154.77	0	0.00	2	15,154.77
3 月	7	7,355.85	1	17,421.00	8	24,776.85
4 月	3	1,327.77	0	0.00	3	1,327.77
5 月	5	637.23	0	0.00	5	637.23
6 月	4	1,308.15	0	0.00	4	1,308.15
7 月	5	634.47	0	0.00	5	634.47
8 月	8	8,158.08	2	2,313.57	10	10,471.65
9 月	6	761.14	1	1,074.17	7	1,835.31
10 月	1	251.73	2	2,580.17	3	2,831.90
11 月	3	220.40	0	0.00	3	220.40
12 月	3	762.81	0	0.00	3	762.81
合 計	49	37,129.16	6	23,388.91	55	60,518.07

第2表 発掘調査一覧表

平成21年12月31日現在

No.	遺 跡 名	地 区 名	位 置	面積 (㎡)	用 途	調 査 年 月	備 考
1	男 里 遺 跡	09－1区	幡代	471.42	工 場	平成21年9月	本書掲載(確認調査) 21-25
2	男 里 遺 跡	09－2区	馬場	494.31	個 人 住 宅	平成21年10月	同上 21-31
3	男 里 遺 跡	09－3区	馬場	132.62	個 人 住 宅	平成21年12月	同上 21-38
4	男 里 遺 跡	09－4区	樽井	234.23	個 人 住 宅	平成21年6月	同上 21-10
5	男 里 遺 跡	09－5区	男里	45.00	電 話 通 信	平成21年12月	同上(確認調査) 21-18
6	男 里 遺 跡	08－9区	男里	162.88	個 人 住 宅	平成21年3月	同上 20-37
7	光 平 寺 跡	09－1区	男里	421.08	個 人 住 宅	平成21年7月	同上 20-39
8	幡 代 遺 跡	09－1区	幡代	424.28	個 人 住 宅	平成21年7月	同上 21-11
9	長 山 遺 跡	08－1区	馬場	222.39	個 人 住 宅	平成21年1月	同上 20-28
10	坊 主 池 遺 跡	09－1区	信達市場	988.80	共 同 住 宅	平成21年9月	同上(確認調査) 21-3
11	坊 主 池 遺 跡	09－2区	信達市場	222.77	分 譲 住 宅	平成21年10月	同上(確認調査) 21-20
12	坊 主 池 遺 跡	09－3区	信達市場	5941.70	宅 地 造 成	平成21年10月	同上(確認調査) 21-21
13	大 苗 代 遺 跡	09－1区	信達大苗代	115.15	個 人 住 宅	平成21年5月	同上 21-5
14	海宮宮池遺跡	09－1区	信達大苗代	112.92	電 話 通 信	平成21年11月	同上(確認調査) 21-26
15	下 村 遺 跡	09－1区	新家	548.87	個 人 住 宅	平成21年9月	同上 21-9
16	下 村 1 号 墳	09－1区	新家	1081.66	宅 地 造 成	平成21年8月	同上(確認調査) 21-23
17	新 家 古 墳 群	09－1区	新家	6633.39	宅地造成 老人ホーム	平成21年4月	同上(確認調査) 20-36
18	兎 田 遺 跡	09－1区	兎田	251.73	個 人 住 宅	平成21年11月	同上 21-32
19	兎 田 遺 跡	08－1区	兎田	406.76	個 人 住 宅	平成21年2月	同上 20-29

第3表 試掘調査一覧表

平成21年12月31日現在

No.	遺跡名	位 置	面積 (㎡)	用 途	調 査 年 月 日	備 考
1	範 囲 外	信達六尾	554.77	介 護 施 設	平成21年3月31日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
2	範 囲 外	信達牧野	17,421.00	宗 教 建 築 物	平成21年6月8日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
3	範 囲 外	樽井	1,592.08	ガ ソ リ ン ス タ ン ド コ ン ビ ニ	平成21年9月16日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
4	範 囲 外	信達牧野	721.49	宅 地 造 成	平成21年10月22日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
5	範 囲 外	男里	1,074.17	倉 庫	平成21年10月23日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。

第4表 立会調査一覧表

平成21年12月31日現在

No.	遺跡名	位 置	面積 (㎡)	用 途	調 査 年 月 日	備 考
1	中小路西遺跡	中小路	1.20	ガ ス	平成21年1月28日	遺構・遺物は確認されなかった。
2	男 里 遺 跡	樽井	84.00	ガ ス	平成21年2月6日	遺構・遺物は確認されなかった。
3	男 里 遺 跡	樽井	154.77	電 話 通 信	平成21年4月6日	遺構・遺物は確認されなかった。
4	男 里 遺 跡	男里	57.70	電 気	平成21年6月2日	遺構・遺物は確認されなかった。
5	岡 中 遺 跡	信達岡中	208.85	地 車 小 屋	平成21年6月8日	遺構・遺物は確認されなかった。
6	男 里 遺 跡	男里	97.67	個 人 住 宅	平成21年6月16日	遺構・遺物は確認されなかった。
7	男 里 遺 跡	男里	100.77	個 人 住 宅	平成21年7月22日	遺構・遺物は確認されなかった。
8	男 里 遺 跡	樽井	68.00	ガ ス	平成21年8月24日 ～27日	遺構・遺物は確認されなかった。
9	海 会 寺 跡	信達大苗代	169.21	個 人 住 宅	平成21年8月31日	遺構・遺物は確認されなかった。
10	男 里 遺 跡	樽井	132.73	分 譲 住 宅	平成21年9月3日	遺構・遺物は確認されなかった。
11	北 野 遺 跡	信達大苗代	113.41	分 譲 住 宅	平成21年10月22日	遺構・遺物は確認されなかった。
12	座頭池遺跡	樽井	12.00	ガ ス	平成21年12月2日	遺構・遺物は確認されなかった。
13	北 野 遺 跡	信達大苗代	122.29	分 譲 住 宅	平成21年12月15・ 16日	遺構・遺物は確認されなかった。

第2章 男里遺跡の調査

第1節 既往の調査（PL. 1、2）

男里遺跡は市域平野部の北西端に位置し、男里川右岸に形成された沖積地上に展開する旧石器時代から近世に至る複合遺跡である。

地形的には、遺跡中央に位置する金熊寺川旧河道によって形成された氾濫原を主とし、氾濫原東縁に沖積段丘が、さらに遺跡西縁を流れる現男里川河道に沿って自然堤防が発達している。遺跡中央に位置する双子池は旧河道の痕跡とされ、南北2つの溜池の間を「信長街道」^①が横断する。北に位置する双子下池は13世紀以降の築造^②、上池については17世紀代の築造、20世紀前半の拡大を経て現在の姿になったものと考えられている^③。現在沖積段丘上には馬場集落があり、自然堤防上には男里集落が立地する。一方、氾濫原は主として耕作地として利用されてきたが、近年氾濫原と段丘との境界を縫うように大規模な府道が建設されたことで、周辺の景観も大きく様変わりしつつある。

男里遺跡では昭和50年代以降、本市教育委員会をはじめとして、大阪府教育委員会や財団法人大阪府文化財センター等による発掘調査が着実に実施されており、これまでに数多くの成果が蓄積されてきた。以下にその概要を述べる。

縄文時代後期以前の資料は採集品や二次移動を受けたことが明らかなものに限られる。旧石器時代のナイフ形石器^④が双子下池より採集され、遺跡南東部より縄文時代中期末から後期初頭の遺物が出土^⑤するが、いずれも遺構に伴うものではなく詳細は明らかでない。晩期には双子池北方において長原式併行期のピット^⑥、遺跡北西縁から北縁部において滋賀里Ⅲ・Ⅳ式期の溝^⑦や谷^⑧、遺跡北西部や双子上池において流路^⑨が確認されている。滋賀里期の遺物にはサヌカイト原礫やチップ、石棒なども含まれることから、近隣に集落が存在する可能性が高い。後期から晩期には遺跡中央から北西部、氾濫原に属する地点に活動の中心が求められる。双子上池堤体部の調査では長原式期と弥生時代前期の土器が同一の包含層より出土している^⑩。

弥生時代前期には双子池南方に遺跡が展開するものと推定されるものの、未だ明確ではない。中期前葉には遺跡北西縁部、上述した谷の埋土上層に遺物が含まれていることから、谷の南東側に集落が求められる。中期中葉から後葉には遺跡南東部の沖積段丘面上において、30数棟の竪穴住居、掘立柱建物や方形周溝墓、木棺墓などからなる集落が展開する^⑪。集落の西側には自然流路を利用した大溝が存在し、絵画土器を含む多量の遺物が出土している。大溝や地形的な条件から集落は南北200m、東西100mの範囲に展開するものと考えられる。遺物はⅣ様式のもものが主体を占め、時期的に限定された集落といえる。集落の北西約500mに位置する双子下池堤体部の調査において当該期のまとまった資料が知られるほか^⑫、近年は遺跡南東部においても新たな資料の獲得^⑬が相次いでいる。

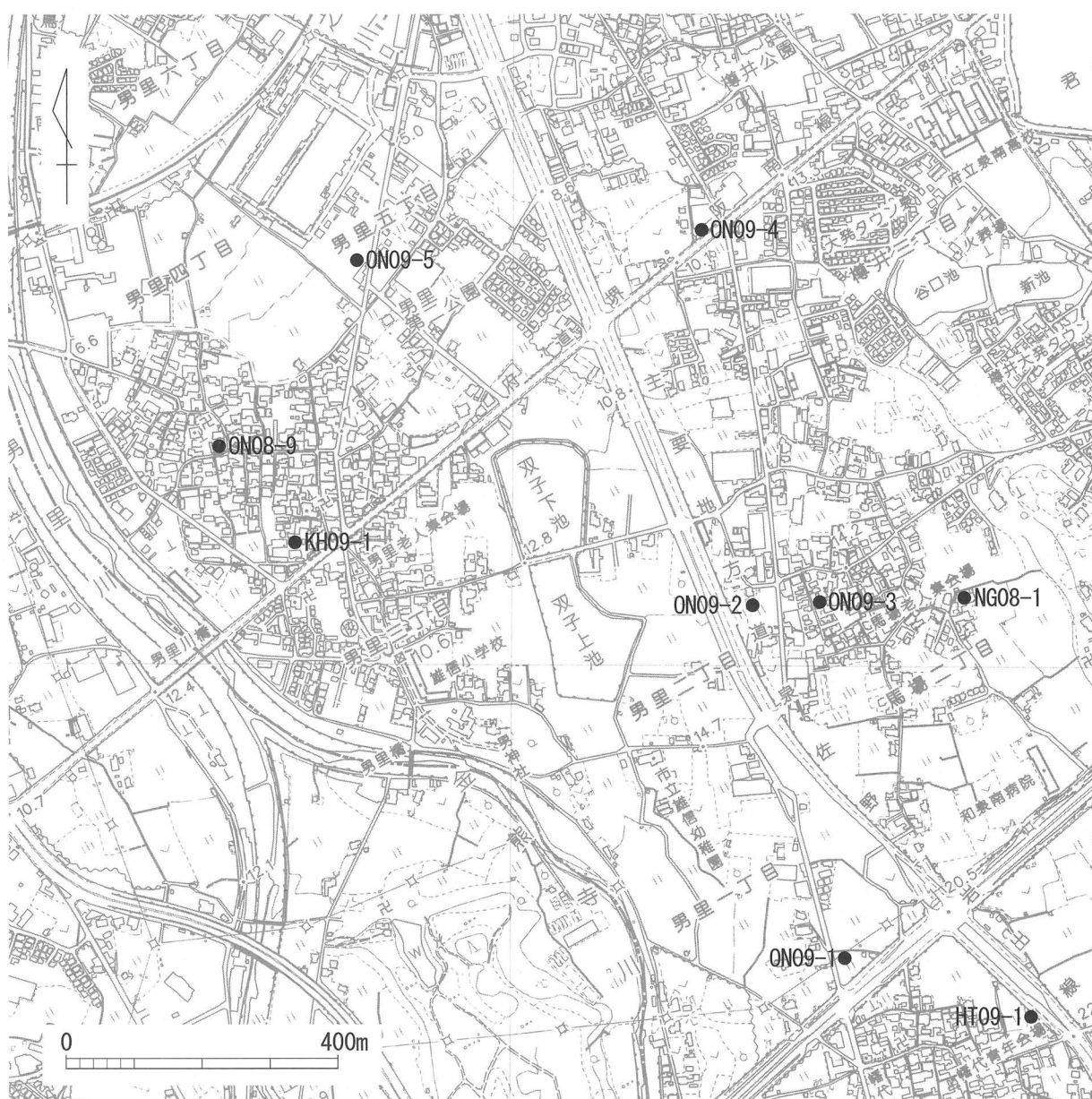
庄内併行期から布留式期には双子池内部を南北に縦断する流路および流路東岸に展開する集落が確認されている。集落は方形竪穴住居^⑭や掘立柱建物や井戸^⑮よりなるが、その広がりについては明瞭でない。続く古墳時代中期に属する遺構や遺物は今のところ未確認である。後期には遺跡北西縁部、氾濫原上において竪穴住居^⑯が確認されている。

飛鳥・奈良時代には、双子池の東西両岸にあたる地点より竪穴住居、掘立柱建物、廃棄土坑など^⑰

が確認され、遺跡北西部において掘立柱建物[㊟]が確認される。また双子池北端部ではしがらみを備えた流路[㊟]が確認されている。

平安時代には双子池西側に掘立柱建物[㊟]、双子池北東にも掘立柱建物[㊟]や廃棄土坑[㊟]などが確認される。いずれも10世紀後半代のものであり、これらに少し遅れて北西部において掘立柱建物よりなる集落[㊟]が出現する。

平安時代末から鎌倉時代には前代の集落域に加えて、遺跡南東部にあたる現馬場集落南端においても集落が現れる[㊟]。遺構や遺物包含層の分布によれば同時期に複数集落が併存していたことが確実とみえ、現在みられる各集落域が中世に遡り得ることを示唆するものといえる。またこれら中世集落の周辺では瓦類の出土が顕著[㊟]で、遺跡南東部では小字より「安狼寺」の存在が想定されており、同様に現男里集落南西部においても瓦類が多く出土[㊟]することから、現在の光平寺に連なる可能性が高いものと考えられている。光平寺は12世紀後半の創建の後、14世紀に至るまで屋瓦の補修を伴う維持



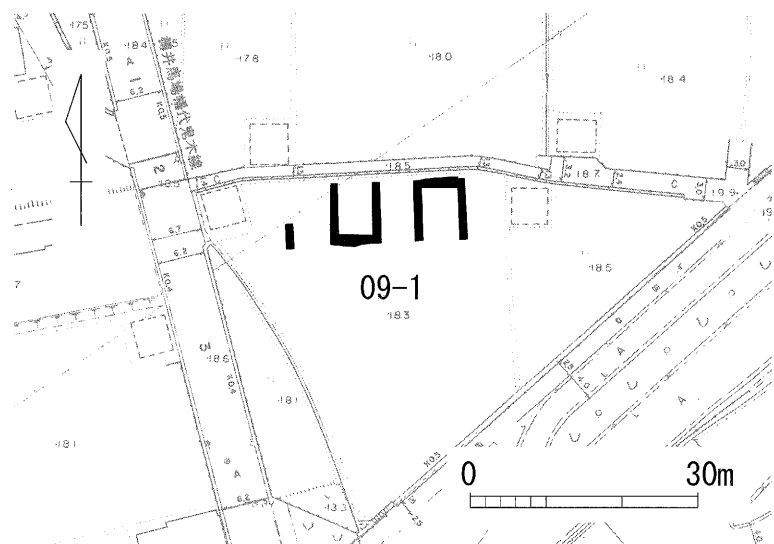
第1図 男里遺跡、光平寺跡、幡代遺跡、長山遺跡調査区位置図

管理がなされつつ、15世紀代に何らかの伽藍縮小の動きがあったものと推測される。他方、遺跡南東部の集落は、現馬場集落南端周辺に展開する一群と、より南方に展開する一群^⑧が知られ、後者では12世紀代の鍛冶炉等が確認されるものの長くは続かず、13世紀代には廃絶している。前者においても13～14世紀代に掘立柱建物や井戸、土坑等による集落が存在するも、程なくして築かれた大規模な溝によって遺構が破壊されている^⑨。新たな耕地開発に伴い集落域そのものは北に移動し、現在の馬場集落と重複する地点へと移動したものと予測されるのである。こうした中世後半を画期とする集落の動向はいわゆる集村化現象として捉えることが可能であり、市内の遺跡においても、いくつかの例^⑩を挙げることができる。以降、これらの集落は伝統的景観を形成しつつ、現在へと連なっていく。

第2節 09－1区の調査

1. 位置（第1、2図）

調査区は遺跡の南端にあつて、国道26号「幡代」交差点の北約50mに位置する。現幡代集落の北縁に接する耕作地に含まれており、地形的には沖積段丘に属する。周辺では調査区の西約50mの地点において、弥生時代から古墳時代に埋没した開析谷^⑪や弥生時代以前の不定形の落ち込み^⑫などが確認されている。現況は休耕地であり、トレンチは5ヵ所設定し、必要に応じて拡張した。



第2図 男里遺跡 09-1 区地形図

2. 層位と遺物の出土状況（PL. 3、7、8）

確認された層位はいずれのトレンチにおいてもほぼ共通するものであった。現代耕作土である暗灰色土（1層、約15cm）および明灰色砂質土（2層、約5cm）、床土である灰白色混じり暗橙色砂質土（3層、約10cm）以下、旧耕作土である暗灰褐色砂質土（4層、約10cm）がほぼ全域にみられ、旧耕作土直下には黄灰色粘土が広がる。調査区東端に位置する第1トレンチのみ現代耕作土の直下に黄灰色土が露呈する。旧耕作土等は既に削平されてしまっているようである。遺構はすべて黄灰色土上面において確認された。同層上面の標高は17.7m～18.0mを測り、西から東へ緩やかに傾斜している。また4層より瓦器や土師器といった中世遺物が出土しているが、いずれも細片のため詳細は不明である。

3. 遺構（PL. 3、7、8）

確認された遺構は溝2条、ピット6基である。SD01は第1トレンチ北東隅から第4トレンチ南西隅

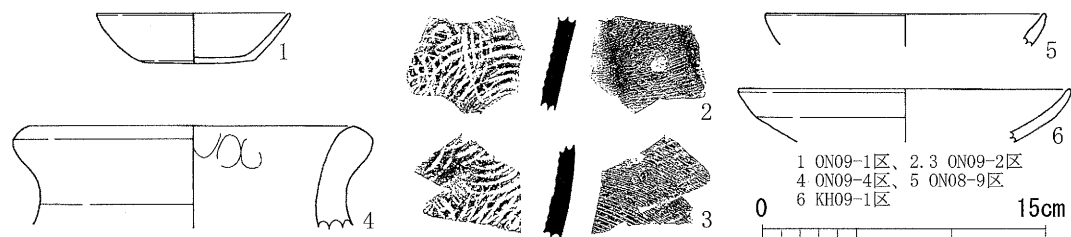
へと調査区を横断するものである。検出長 18.0 m、最大幅 3.1 m、深さ 80 cm を測る。部分的な確認に留まるため全容については断定できないが、北西から南東方向へ向かって極めて緩やかな弧を描きつつ進み、第 5 トレンチの南方を通過し調査区外へと伸びるものと考えられる。断面形状は基本的に整った逆八字状を呈するが、斜面にテラス状の平坦面を伴う地点もある。底部は概ね平坦であって南北端の比高は 10 cm に満たないが、わずかに南端の方が低い。埋土は上から淡灰褐色シルト、暗褐色シルト、暗黄褐色混じり褐色シルトの 3 層である。いずれの埋土もシルト質を呈し砂礫等をほとんど含まないことから、比較的短期間のうちに埋没したものと考えられる。遺物に関しても北端部の中下層よりわずかに出土したのみである。

SD02 は第 1 トレンチ南端部において確認された。検出長 1.2 m、最大幅 70 cm、深さ 16 cm を測る。平面的には南東から北西方向へとほぼ直線的に伸びる。断面形状は浅い碗形を呈し、底部についてはわずかに東端の方が高い。埋土は 1 層であり、灰褐色砂質土である。須恵器や土師器の細片が僅かに出土しているものの、詳細は不明である。埋土が旧耕作土である 4 層と近似することから、中世以降の耕作関連遺構であるものと考えられる。また東西端ともに調査区外へと伸びており全容は不明であるが、特に西側については他のいずれのトレンチにおいても延長が確認されなかったことから、第 1、2 トレンチ間の空閑地において収束している可能性が高い。

ピットはいずれも円形または楕円形の平面形状を呈するもので、直径 10 ～ 40 cm、深さ最大 20 cm を測る。ピット 1 ～ 3 には柱痕跡を伴う。ピット 2 より黒色土器、ピット 3 より土師器の細片が出土している。ピット 1、2 は軸をほぼ真北に向けた柱列もしくは掘立柱建物である可能性があるものの、その他のピットについては分布が散発的であり、現状では明確なまとまりを見出すことができない。

4. 遺物 (PL. 16、第 3 図)

上述したように出土遺物は量的に乏しく、また詳細の判明す



第 3 図 男里遺跡、光平寺跡出土遺物

るものがほとんどみられなかった。1 は土師器杯である。SD01 北端部、埋土下層より出土した。わずかに中央が突出する底部より大きく直線的に外傾する体部を伴い、口縁部はほとんど外反せず丸く収める。全体に薄く仕上げられるも摩滅が著しく調整は不明である。プロポーシオンより 9 世紀代の製品であると考えられる。SD01 では他に黒色土器等が出土しているが、細片のため図化不能であった。

第 3 節 09 - 2 区の調査

1. 位置 (第 1、4 図)

調査区は遺跡中央部東寄りにあって、現馬場集落西縁に広がる耕作地に含まれる地点である。地形

的には氾濫原もしくは沖積段丘西縁部に属する。調査区の西約 20 m には昨年度弥生時代飯蛸壺がまとまって出土した 08-2 区[®]が位置する。現況は休耕地であり、トレンチは 1 ヲ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況

(PL. 4、9)

現代耕作土である灰黒色土（1 層、約 35 cm）以下、床土もしくは旧耕作土と考えられる淡褐色混じり明灰色砂質土（2 層、約 5 ～ 10

cm）、淡褐色礫混シルト（3 層、約 20 cm）と続き、地山であるにぶい黄褐色礫混シルトへと至る。トレンチ東半部では 3 層に代わって暗褐色礫混シルトがみられ、また地山に関してもトレンチ東半部では明褐色砂礫となっている。地山上面は若干の起伏を伴うものの概ね平坦であり、標高は 12.9 m を測る。地山面において遺構が確認された。

3. 遺構 (PL. 4、9)

確認された遺構はピット 1 基である。トレンチ西端において部分的に確認されたため、トレンチを拡張し全体の把握に努めた。いびつな楕円形を呈する直径 40 cm、確認面よりの深さ 25cm を測るもので、断面形状は逆台形を呈する。ほぼ中央に径 10 cm を測る柱痕跡を留め、直下には和泉砂岩および礫岩の自然石を用いた根石を伴う。埋土はピット掘方がにぶい黄褐色混じり淡暗褐色シルト、柱痕跡については淡褐色混じり灰褐色シルトであった。柱痕埋土より須恵器および土師器細片が出土した。

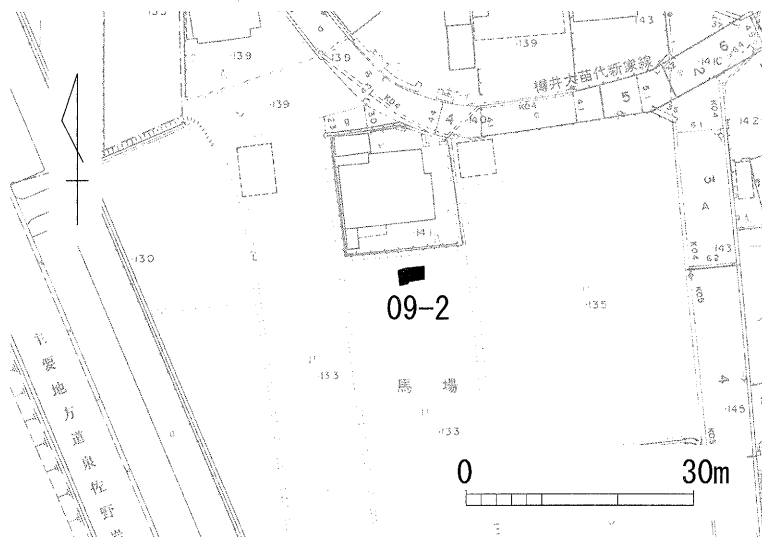
4. 遺物 (PL. 16、第 3 図)

2、3 は須恵器甕の体部である。器壁が厚く、大型の製品と考えられる。外面には横位のカキ目が施され、内面には同心円文が残る。外面には帯状にオリーブ色を呈する自然釉がかかる。他に同一個体と考えられる小片が 2 点出土している。

第 4 節 09 - 3 区の調査

1. 位置 (第 1、5 図)

調査区は遺跡の東部にあって、現馬場集落の南西部に位置し、市道馬場西線に西面する地点である。地形的には沖積段丘に属する。周辺は、現馬場集落内においては比較的多くの調査が行われている地点であるが、今のところ実体のある遺構の確認例はさほど多くはない。西約 100 m には 09-2 区が位置するほか、北約 40 m に位置する 89-1 区において中世柱穴などが確認されている[®]。現況は更地で



第 4 図 男里遺跡 09-2 区地形図

確認された層位は、基本的にすべてのトレンチにおいて共通するものであった。以下、最も代表的な第4トレンチの状況について述べる。

盛土（1層、約30cm）以下、灰黒色土（2層、約15cm）、淡灰白色砂質土（3層、約5cm）、暗橙色混じり淡灰褐色砂質土（4層、約5cm）、淡褐灰色砂質土（5層、約30cm）の各層位が概ね水平堆積をみせる。2層は現代耕作土であり、以下は床土（3、4層）、旧耕作土（5層）である。5層直下には暗褐色シルト（6層、約20cm）を経て、地山であるにぶい黄褐色シルトへといたる。6層は男里遺跡北部において広く分布する黒褐色系土層に対応するものである。地山の状況はおおむね平坦であるが、各トレンチにおける標高は約8.60～8.80mを測り、東から西へと緩やかに傾斜していることがわかる。各トレンチ共、地山上面において精査を行ったが遺構は確認されなかった。また遺物については、第1トレンチより土師質真蛸壺が出土したほか、第3トレンチ5層より瓦器細片が出土している。

3. 遺物（PL. 16、第3図）

4は土師質真蛸壺である。第1トレンチより出土している。層位的な取り上げが出来なかったため、出土層位は不明である。頸部より強く外反する口縁部を持ち、端部は丸く収める。所謂砲弾型を呈する製品である。他に同一個体と考えられる体部片が出土している。

第6節 09－5区の調査

1. 位置（第1、7図）

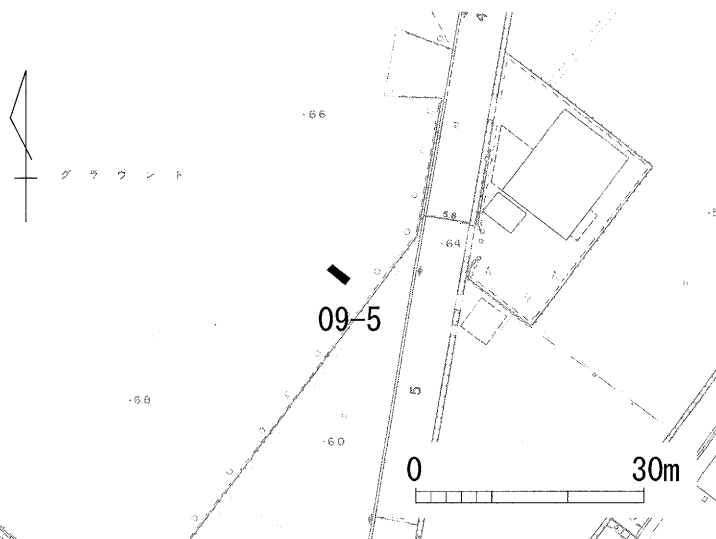
調査区はバンドー化学南海工場敷地内の東南部に位置する。現況は駐車場として利用されている地区の一角で、樹木が数本植えられており、それを伐採した地点にトレンチを1ヵ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況

（PL. 4、10）

表土および盛土（1層、約120cm）を除去すると、暗灰色土（2層、約20cm）の水平堆積が認

められ、その直下に暗灰色砂質土（3層）が確認された。当層からは湧水が認められた。周辺の住民によると当該地は駐車場として利用される以前は水田であったとのことから、2層が当時の耕作土であったと考えられる。遺構、遺物は認められなかった。

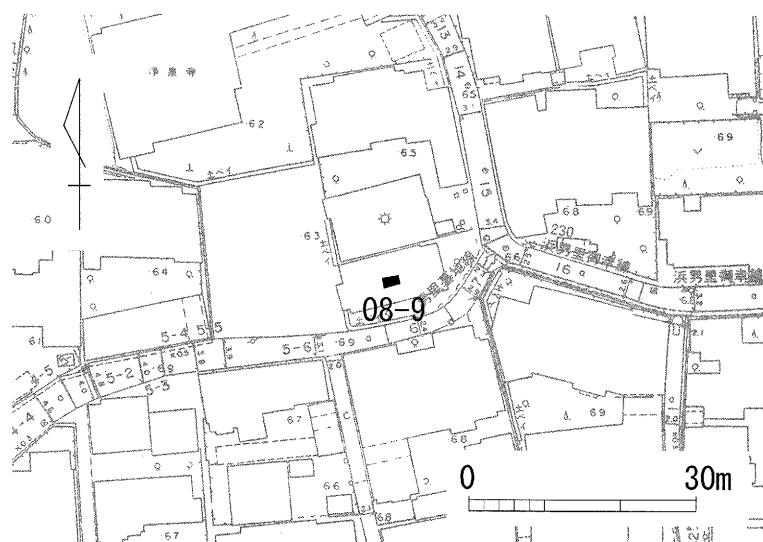


第7図 男里遺跡 09-5 区地形図

第7節 08－9区の調査

1. 位置（第1、8図）

調査区は遺跡の北西部にあって、現男里集落の中央北西寄りに位置する。地形的には男里川河岸に形成された自然堤防に属する。調査区の北西側は、現集落内において比較的多くの調査例が集中する地点であり、中世の遺構や遺物包含層等が確認されている。現況は更地であり、トレンチは1カ所設定した。



第8図 男里遺跡 08-9 区地形図

2. 層位と遺物の出土状況

(PL. 4、10)

盛土以下、基本的には淡黄灰褐色土（4層、約30～50cm）、淡灰褐色土（5層、約20cm）、淡褐色混じり灰褐色土（6層、約40cm）と続き焼土である暗赤褐色土（7層、約10cm）を経て地山である灰褐色砂礫へと至る。トレンチ南端では7層と地山の間に淡黄褐色土が薄く介在し、わずかに土師器などの遺物を含む。4、5層はいずれも盛土であり、トレンチ北西隅において4層をベースとする焼土坑が存在していた。焼土がレンズ状に堆積しており、近世の陶磁器を数点含む。6層は旧耕作土であり、下層の堆積よりみて中世以降の形成であると考えられる。7、8層および地山面において精査を行ったが遺構は確認されなかった。

3. 遺物（PL. 16、第3図）

5は土師器小皿である。地山直上に堆積する淡黄褐色土より出土した。体部より直線的に立ち上がり口縁端部は丸く収める。全体に丁寧なナデが施される。他に土師質真蛸壺が出土しているが、細片のため図化し得なかった。

- 註 ① 大阪府教育委員会『熊野・紀州街道一調査報告編一』（1987）
② 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅱ』（1997）
③ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅶ』（2003）
④ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅵ』（2002）
⑤ （財）大阪府文化財センター『男里遺跡』（2005）
⑥ 泉南市教育委員会「男里遺跡 95-1 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XⅢ』（1996）
⑦ 泉南市教育委員会「男里遺跡・Ⅱ」『泉南市文化財年報No.1』（1995）
⑧ 泉南市教育委員会「E区の調査」『男里遺跡発掘調査報告書』（2002）
⑨ 泉南市教育委員会「男里遺跡 96-7 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XⅣ』（1997）
泉南市教育委員会「男里遺跡 99-9 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XⅧ』（2001）
大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅷ』（2004）

- ⑩ ④と同じ
- ⑪ ⑤と同じ
- ⑫ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅳ』（1999）
- ⑬ 泉南市教育委員会「男里遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XⅩⅣ』（2007）
- ⑭ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅶ』（2004）
- ⑮ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅴ』（2000）
- ⑯ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』（2002）
- ⑰ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』（1978）
泉南市教育委員会「男里遺跡 96-1 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XⅣ』（1997）
- ⑱ 泉南市教育委員会「D区の調査」『男里遺跡発掘調査報告書』（2002）
- ⑲ ②と同じ
- ⑳ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』（1978）
- ㉑ 泉南市教育委員会「男里遺跡 95-2 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XⅢ』（1996）
- ㉒ （財）大阪府埋蔵文化財協会「1993 年度の調査成果」『男里遺跡』（1994）
- ㉓ ⑬と同じ
- ㉔ 平成 2 年度、泉南市教育委員会による 90-10 区の調査。『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』（1991）にトレンチ位置掲載。
平成 18 年度、泉南市教育委員会による 06-8 区の調査。『泉南市遺跡群発掘調査報告書XⅩⅤ』（2008）にトレンチ位置掲載。
（財）大阪府文化財センター『男里遺跡』（2005）
- ㉕ 泉南市教育委員会「男里遺跡 99-4 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XⅦ』（2000）
（財）大阪府文化財センター『男里遺跡』（2005）
- ㉖ 堀田啓一「考古編」『泉南市史 史料編』泉南市（1982）
泉南市教育委員会「光平寺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XⅡ』（1995）
泉南市教育委員会「光平寺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XⅩⅤ』（2008）
- ㉗ ⑤と同じ。
- ㉘ 平成 18 年度、泉南市教育委員会による 06-8 区の調査。
泉南市教育委員会「男里遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XⅩⅤ』（2008）
- ㉙ 泉南市教育委員会「幡代遺跡 03-3 区の調査」『新伝寺遺跡 91-1 区・幡代遺跡 03-3 区発掘調査報告書』（2004）
泉南市教育委員会『戎畑遺跡発掘調査報告書』（2005）
- ㉚ 泉南市教育委員会「男里遺跡 91-13 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅸ』（1992）
- ㉛ 泉南市教育委員会「男里遺跡 91-14 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』（1993）
- ㉜ 泉南市教育委員会「男里遺跡 08-2 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XⅩⅥ』（2009）
- ㉝ 泉南市教育委員会「男里遺跡 89-1 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』（1990）
- ㉞ 泉南市教育委員会「男里遺跡 92-6 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』（1993）
- ㉟ 泉南市教育委員会「樽井南遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XⅣ』（1997）

第3章 光平寺跡の調査

第1節 既往の調査（PL. 1、2）

光平寺跡は市域平野部の北西端、現男里集落の南西部に位置する現在の光平寺境内を中心とする南北200 m、東西160 mが遺跡範囲、すなわち寺域として推定されている。地形的には男里川支流である金熊寺川と菟砥川との合流地点右岸に形成された自然堤防上に立地する。

光平寺跡における本格的な発掘調査は、1978年度大阪府教育委員会によって現在の光平寺境内の北西隣接地において行われたことにはじまる^①。調査の詳細は不明であるものの、蓮華文軒丸瓦や梵字文軒丸瓦、仏像文軒丸瓦といった軒瓦のほか、多量の平、丸瓦や土器等が出土している。軒瓦の年代観による限り、光平寺は12世紀後半の創建後、13～14世紀にかけて維持されていたと推測することが可能である。他に15世紀代の瓦質土器が多く出土しており、同時期に廃棄されたものと仮定すれば、15世紀以降の伽藍縮小の動きを読取ることができる。遺跡東縁部に位置する07-1区^②においても廃棄土坑が確認され、13、14世紀代の瓦類、15世紀代の瓦質土器などが多く出土している。他にも遺跡北部および南西部を中心として10件程度の調査が実施されているが、現在のところ中世光平寺に直結する遺構は未確認である。本調査区の南隣接地である男里遺跡55-1区^③では鎌倉時代の掘立柱建物、南約100 mに位置する93-2区^④では瓦窯の可能性も指摘される土坑が確認され、13世紀代の梵字文軒丸瓦や巴文軒丸瓦が出土している。

第2節 09-1区の調査

1. 位置（第1、9図）

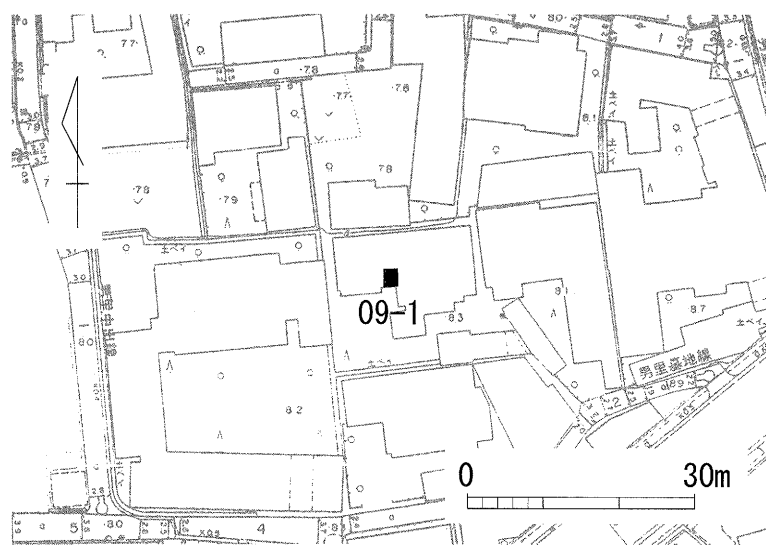
調査区は遺跡の中央にあつて、府道堺阪南線「男里」交差点の西約50 mに位置する。現光平寺境内より北東約80 mの地点である。地形的には男里川によって形成された自然堤防上に立地する。現況は更地であり、トレンチは1ヵ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況

（PL. 4、11）

盛土（1層、約40cm）を除去すると、トレンチ南端部にのみ耕作

土である灰黒色シルト（2層、約10 cm）が存在するものの、基本的には淡褐色砂質土（3層、約10～20 cm）が広がる。トレンチ中央部分に存在する攪乱によって耕作土の大半は失われているようで



第9図 光平寺跡09-1区地形図

ある。トレンチ南半部から中央部では3層直下に河川性堆積の地山である褐色砂礫が露呈する。地山は南から北へ向かって大きく落込んでおり、南北端での比高は40cmを測る。地形的に一段低くなる北半部において3層直下に褐色混じり淡褐色礫混土（5層、約40cm）が介在する。5層は硬く締まり、盛土または整地層であるものと判断される。3、5層には遺物細片が多く含まれていた。大半は取り上げ不能であったが、5層より数点の土師器皿などが出土している。3層上面ならびに地山面において精査を行ったが遺構は確認されなかった。

3. 遺物（PL.16、第3図）

6は土師器小皿である。体部よりやや外湾しつつ立ち上がり、端部は丸く収める。橙色を呈し、胎土にはクサリレキを多く含む。

註 ① 民間宅地開発に伴う発掘調査として1978年11月に実施された。コンテナ約80箱分の出土遺物がある。

堀田啓一「考古編」『泉南市史 資料編』泉南市（1982）

泉南市教育委員会「光平寺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XXV』（2008）

② 泉南市教育委員会「光平寺跡 07-1 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XXV』（2008）

③ 泉南市教育委員会「55-1 地区」『男里遺跡発掘調査報告書Ⅱ』（1981）

④ 泉南市教育委員会「光平寺跡 93-2 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XⅡ』（1995）

第4章 幡代遺跡の調査

第1節 既往の調査（PL. 1、2）

幡代遺跡は市域平野部の南西端に位置する。遺跡西半に現幡代集落が占地し、東側は主に耕作地として利用されている。地形的には金熊寺川右岸に発達した沖積地に属するが、既往の調査では安定したシルト面が確認される地点は遺跡北東部などに限定され、他の地点では河川性堆積による砂礫が確認されることが多い。想像以上に複雑な微地形が隠されていることが明らかとなりつつある。

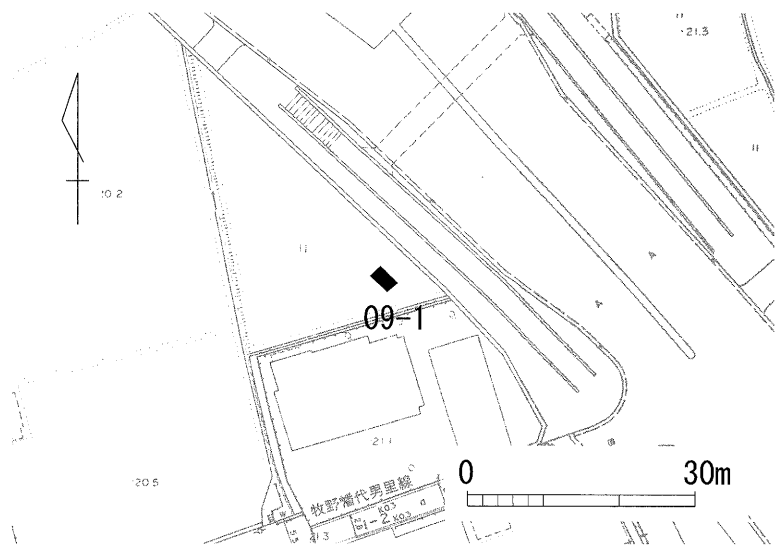
現集落内を中心として数十件の調査が行われているが、遺構、遺物が確認された地点はさほど多くはなく、遺跡の変遷を語るうえでは未だデータ不足の感が否めない。弥生時代^①や平安時代後期^②の資料も知られるが、散発的であり実体は不明である。平安時代後期には遺跡北東部から中央部に集落^③が出現する。13世紀代を盛期とするが長くは存続しておらず、14世紀以降に現集落付近へと移動したものと推測される。ただし今のところ現集落内では中世に遡り得る資料はほとんど確認されていないことから、遺跡内の空闲地もしくは他所へと移動した後、近世に至って現集落内へと移動した可能性も考えられる。近世以降の遺構としては耕作に関連する野井戸^④や耕地境界^⑤などが目につくほか、多量の遺物を含む廃棄土坑^⑥などが確認されている。

第2節 09－1区の調査

1. 位置（第1、10図）

調査区は遺跡の中央にあつて、府道金熊寺男里線「幡代東」交差点の北西約50mに位置する。現幡代集落の東端にあたり、府道に東面する地点である。地形的には沖積段丘に属するが、中世以降の遺構面となる良好なシルト層の地山は決して画一的には広がっておらず、むしろ氾濫原を構成する砂礫層が確認される地点が多い。

現況は休耕地であり、トレンチは1ヵ所設定した。



第10図 幡代遺跡 09-1区地形図

2. 層位と遺物の出土状況（PL. 4、11）

確認された層序は極めて単純である。現代耕作土である灰黒色シルト（1層、約15cm）および床土である暗褐灰色砂質シルト（2層、約15cm）を除くと、直下に地山である淡褐色礫が広がる。地山は河川性堆積によるものと判断され、氾濫原に属するものと考えてよい。遺構、遺物は確認されな

かったが、地山上面においてトレンチ際を南東から北西方向へと一直線に伸びる土管暗渠がみられた。近現代のものと考えられる。

- 註 ① (財)大阪文化財センター「幡代遺跡」『大阪府下埋蔵文化財研究会(第30回)資料』(1994)
- ② 泉南市教育委員会「幡代遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅴ』(1988)
- ③ ①と同じ。
泉南市教育委員会「幡代遺跡」『泉南市文化財年報No.1』(1995)
- 泉南市教育委員会「幡代遺跡 03-3 区の調査」『新伝寺遺跡 91-1 区・幡代遺跡 03-3 区発掘調査報告書』(2004)
- ④ 泉南市教育委員会「幡代遺跡 99-1 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅷ』(2001)
- ⑤ 泉南市教育委員会「幡代遺跡 98-1 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』(2000)
- ⑥ 泉南市教育委員会「幡代遺跡 94-6 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』(1996)

第5章 長山遺跡の調査

第1節 既往の調査（PL. 1、2）

長山遺跡は市域平野部の中央西寄りにあつて、基盤山地より北西方向へと伸びる長山丘陵の西麓に位置する。地形的には遺跡南東部を丘陵が占め、西半は男里川右岸の沖積段丘、北東部は丘陵東麓に発達する中位段丘に属する。このうち沖積段丘面については、現馬場集落の北東に隣接する耕作地として利用されている。これまでに本件を含めて7件の調査が行われ、その大半が丘陵先端の西側に集中している。溝や鋤溝といった耕作に関連する遺構^①が確認され、時期的には明確ではないものの、中世以降の耕地開発を示唆するものと考えられている。

第2節 08－1区の調査

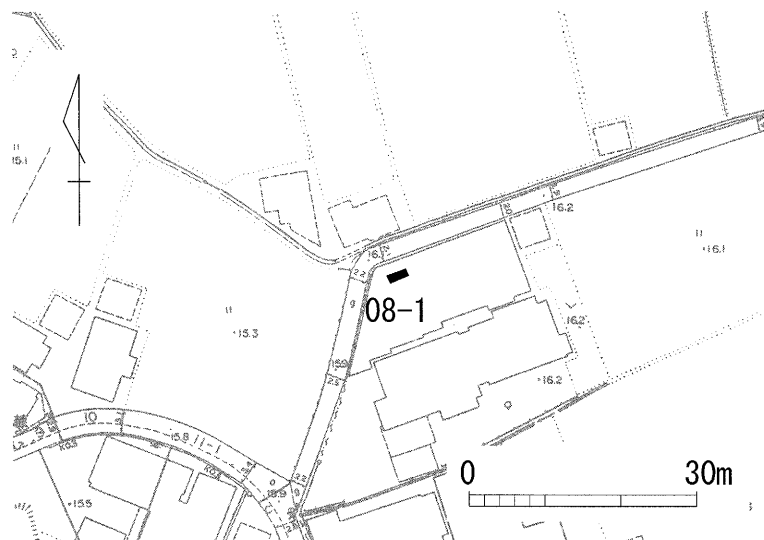
1. 位置（第1、11図）

調査区は遺跡の中央西縁にあつて、現馬場集落の南東端に位置する。地形的には沖積段丘の東縁部にあたり、調査区の東約100mにおいて長山丘陵へと達する。現況は更地であり、トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況

（PL. 4、11）

現代耕作土である淡灰白色土（1層、約20cm）以下、暗橙色混じり灰褐色土（2層、約15cm）、暗橙色土（3層、約5cm）、褐色混じり灰褐色砂質土（4層、約15cm）、暗褐色混じり灰褐色砂質土（5層、約20cm）、暗褐色砂質シルト（6層、約20cm）と続き、地山であるにぶい暗黄色シルトへと至る。2、3層は現代床土、4、5層はそれぞれ旧耕作土と考えられる。地山直上に堆積する6層は少量の土師器細片を含むことが観察されたが、取り上げ不能であり詳細は不明である。地山は東から西へ緩やかな起伏がみられるものの、概ね平坦である。上面の標高は15.3mを測る。6層ならびに地山上面において精査を行ったが遺構は確認されなかった。



第11図 長山遺跡 08-1区地形図

註 ① 泉南市教育委員会「長山遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』（1995）
泉南市教育委員会「長山遺跡 98-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVI』（1999）

第6章 坊主池遺跡の調査

第1節 既往の調査 (PL. 1、2)

坊主池遺跡は市域平野部のほぼ中央にあつて、現鳴滝集落の南東に位置する。かつては鳴滝、中小路、信達市場の境界に広がる耕作地であったが、近年工場地や宅地としての開発が進み、周辺の景観は大きく変わりつつある。遺跡名の由来となっている坊主池は低位段丘上の浅谷を堰き止めて築かれたもので、池の北堤を含む径 200 m × 100 m の範囲が遺跡範囲として周知されている。地形的には遺跡南東部がため池すなわち段丘面上の浅谷となり、他は低位段丘に属する。中世の遺物散布地であり、本調査区の西隣接地で行われた 99-1 区を端緒として、これまでに数件の調査^①が行われているが、いずれも実体のある遺構、遺物の発見には至っていない。

第2節 09 - 1 区の調査

1. 位置 (第12、13 図)

調査区は遺跡の北西縁部にあつて、坊主池の北西約 80 m、市道宮本団地市場線に南面する地点である。現信達市場地区の北端部にあたり、調査区の北西約 100 m には現鳴滝集落が位置する。地形的には低位段丘に属する。現況は休耕地であり、トレンチは2ヵ所設定した。西から東へ第1、2トレンチと呼称する。

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 5、12)

両トレンチとも基本的にはほぼ同じ状況を示す。現代耕作土である淡灰黒色土 (1 層、約 20cm)、床土である暗橙色土 (2 層、約 5cm) 以下、暗黄灰色砂質シルト (3 層、約 20cm)、淡暗褐灰色砂質



第12図 坊主池遺跡、大苗代遺跡、海営宮池遺跡調査区位置図

土（4層、約10cm）、暗黄褐色混じり灰褐色土（5層、約10cm）の各層が概ね水平堆積を呈し、地山である黄灰白色粘土へと至る。3～5層はいずれも旧耕作土であり、うち5層からは中世と思しき遺物がわずかに出土しているが、かなり磨滅しており詳細は不明である。

地山は概ね平坦であるが、各々の標高は第1トレンチでは15.3m、第2トレンチでは15.2mをそれぞれ測り、東から西に向けて極めて緩やかに傾斜している。第2トレンチ西端部において、西に向かって緩やかに傾斜する落ち込みが断面確認された。長さ2m以上、深さ40cmを測り、埋土は地山のブロックを多く含む暗灰褐色砂質シルトである。埋土が旧耕作土であることから耕作に関連するものと判断される。層位的には5層以前に遡るものであるが、土質等の観察からは両者の間に大きな隔たりは覗うことができない。中世以降の所作と考えられる。

第3節 09-2区の調査

1. 位置（第12、13図）

調査区は09-1区北東側の隣接した地点に位置する。現況は全面に盛土が施された平坦地となっていた。トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況

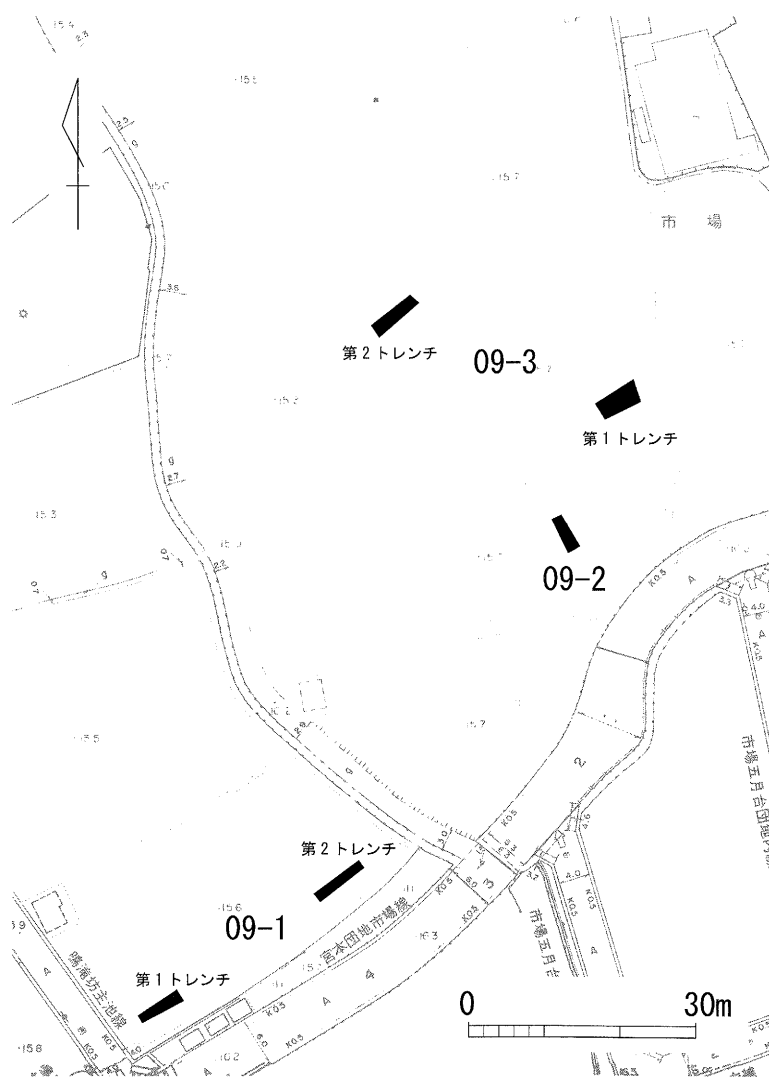
（PL. 5、12）

盛土（1層、約135cm）を除去すると旧耕作土である暗灰色土（2層、約25cm）、その直下に地山となる暗黄褐色混じり灰色粘質土が確認された。遺構、遺物は認められなかった。

第4節 09-3区の調査

1. 位置（第12、13図）

調査区は09-2区の北隣接地である。現況は全面に盛土が施された平坦地となっていた。トレンチは2カ所設定し、東側を第1トレンチ、西側を第2トレンチと呼称している。



第13図 坊主池遺跡 09-1、2、3区地形図

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 5、12)

第1、2トレンチは同じ堆積状況であった。盛土（1層、約1.3～1.5m）の下には旧耕作土の暗灰色土（2層、約20cm）、灰色混じり暗褐色土（3層、約20～35cm）と続き、暗黄褐色混じり灰色粘質土の地山へと至る。両トレンチともに遺構、遺物は確認されなかった。

註 ① 泉南市教育委員会「調査の経過」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XⅧ』（2001）

泉南市教育委員会「中小路西・坊主池遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XⅩ』（2003）

第7章 大苗代遺跡の調査

第1節 既往の調査（PL. 1、2）

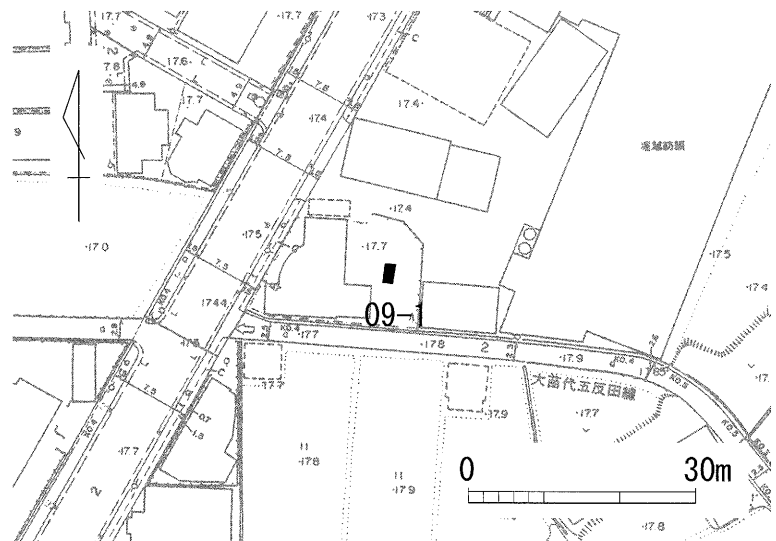
大苗代遺跡は市域平野部の東部にあって、現信達大苗代集落の北端に位置する。地形的には低位段丘の東縁部にあたる。91年度以降、遺跡の西半部を中心として調査が重ねられているが、これまでのところ遺構、遺物が発見されるのは遺跡北縁部に限られている。91-1区では中世前半のピットや溝^⑧が、また南に隣接する98-1区においても中世と考えられるピット^⑨、07-1区においては詳細不明ながらも中世と考えられる遺構^⑩が確認されており、共に周辺に当該期の集落が想定されている。

周辺では、北に新伝寺遺跡、北野遺跡、東に海会寺跡、南に仏性寺跡といった遺跡群が密接に展開しており、それぞれ中世に画期を持つといった特徴が認められる。

第2節 09-1区の調査

1. 位置（第12、14図）

調査区は遺跡の西端部にあって、国道26号「市場北2番」交差点の北西約200mに位置し、市道樽井大苗代新家線に西面する。現信達大苗代集落からは若干北西に外れた地点であり、元来は集落の西側に広がる耕作地に含まれているものと考えられるが、近年は先の市道沿道を中心に宅地開発や工場の建設が進んでいる。調査区の北約100mに大苗代遺跡07-1区、南約100mに仏性寺跡07-1区^④がそれぞれ位置している。地形的には低位段丘に属する。現況は更地であり、トレンチは1ヵ所設定した。



第14図 大苗代遺跡09-1区地形図

2. 層位と遺物の出土状況（PL. 5、13）

盛土（1層、約70cm）以下、灰黒色シルト（2層、約10cm）、灰褐色混じり黄橙色土（3層、約15cm）、灰褐色シルト（4層、約10～20cm）の各層が概ね水平堆積を呈する。さらに黄灰色礫混粘土（5層、約10～20cm）を経て、地山である橙色礫混土へと至る。地山上面には若干の起伏がみられ、直上層である5層は地山の窪んだ地点に厚く堆積している。

確認された層位のうち、2層は現代耕作土、3層は床土、4層は旧耕作土、5層は自然堆積によるものと考えられる。また5層および地山はクサリレキを多く含む。北野遺跡、大苗代遺跡、仏性寺跡

において共通してみられる粘性の非常に強い橙色系粘土よりなる地山の中でも仏性寺跡 07-1 区などに近いが、ここではさほど粘性は強くなかった。地山上面において精査を行ったが、遺構は確認されず、またいずれの層位からも遺物は出土しなかった。

- 註 ① 泉南市教育委員会『大苗代遺跡発掘調査報告書』（2002）
② 泉南市教育委員会「大苗代遺跡 98-1 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVI』（1999）
③ 泉南市教育委員会「大苗代遺跡 07-1 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XXV』（2008）
④ 泉南市教育委員会「仏性寺跡 07-1 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XXV』（2008）

第8章 海宮宮池遺跡の調査

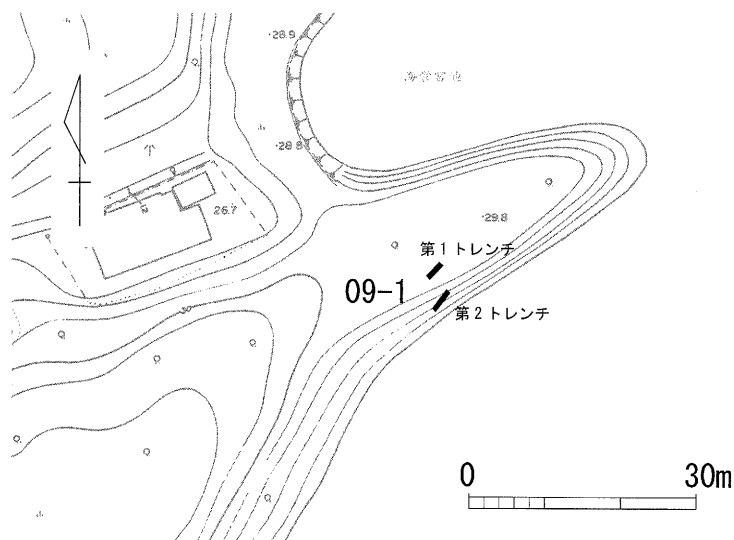
第1節 既往の調査 (PL. 1、2)

海宮宮遺跡は市域平野部の東部にあって、現信達大苗代集落の南方に位置する海宮宮池の北西堤を中心とする径300 m×180 mの範囲を遺跡範囲とする。海宮宮池は基盤山地より北東方向へと伸びる「大苗代丘陵」の北西端の谷状地形を堰き止めて構築されたもので、地形的には高位段丘に属する。本遺跡は1972年に池の内部より木葉形尖頭器が採集されたことを契機^①として発見されたが、以後本格的な発掘調査は本件を含めて3件しか行われておらず、また実体のある遺構、遺物も確認されていないため、その内容は未だ不分明と言わざるを得ない。

第2節 09-1区の調査

1. 位置 (第12、15図)

調査区は遺跡北西端部にあって、海宮宮池北西部、北東方向へと突き出した堤体上に位置し、地形的には高位段丘に属する。調査区の西約15 mに93-1区^②が、南西約15 mには94-1区^③が位置する。周辺はかつては果樹園として利用されていたようであるが、現在は更地となっている。トレンチは2カ所設定した。



第15図 海宮宮池遺跡 09-1区地形図

2. 層位と遺物の出土状況

(PL. 5、13)

確認された層序は両トレンチともに共通するものであった。表土である淡黄灰色土を除去すると堤体盛土であり非常に硬く締まる淡灰褐色混じり黄灰色粘土および灰白色混じり明橙色粘土が現れる。さらに盛土である黄灰色土と黄灰色砂質土を経て、黄灰色混じり淡青灰色粘土へと至る。黄灰色土には現代廃棄物が含まれていることから、近年に施工された盛土であることが分かる。堤体の拡大を図ったものであろう。最下層である淡青灰色粘土は還元色を呈し、また植物遺体を含むことからすると、堤体拡大以前の池内部堆積土である可能性が高い。第1トレンチより中世と思しき土師器細片が数点出土しているが詳細は不明である。

註 ① 堀田啓一「考古・古代」『泉南市史 通史編』泉南市 (1987)

② 泉南市教育委員会「海宮宮池遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X I』 (1994)

③ 泉南市教育委員会「調査の経過」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X II』 (1995)

第9章 下村遺跡の調査

第1節 既往の調査（PL. 1、2）

下村遺跡は市域北東部、新家川右岸の沖積地を中心に立地する。遺跡の北東部に現下村集落が存在し、南西部は耕作地として利用されている。地形的には遺跡の大半が沖積段丘に属するが、東縁部が低位段丘、南西部は氾濫原および谷底低地となっている。

これまでに現集落内を中心として、本件を含め6件の調査が行われている。集落南端部に位置する92-1区では中世のピットや近世のカマド^①が、本調査区の北約40mに位置する95-1区では弥生時代中期の土坑や中世掘立柱建物^②が確認されている。しかし後述するように本年度調査区および北西に隣接する02-1区^③においては対応する遺構面は確認されず、一方、95-1区の南西約150mに位置する01-1区^④では95-1区遺構面に対応する安定したシルト面が確認されるなど、遺跡内の旧地形が一様でなかったことが明らかとなりつつある。更なるデータの蓄積を待ちたい。

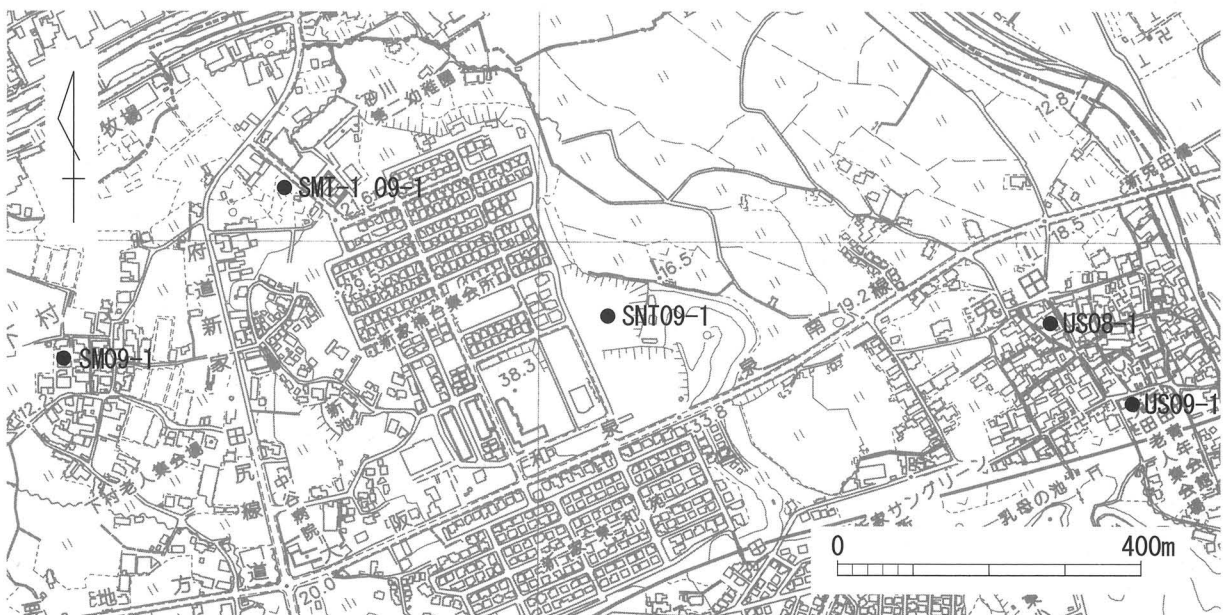
第2節 09-1区の調査

1. 位置（第16、17図）

調査区は遺跡の北東部にあって、現集落の中央やや北寄りに位置する。地形的には沖積段丘もしくは低位段丘に属する。現況は更地であり、トレンチは1カ所設定した。

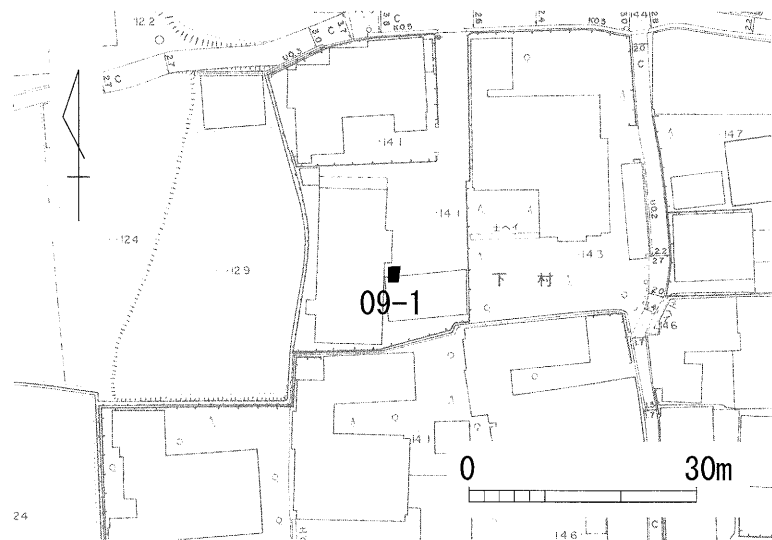
2. 層位と遺物の出土状況（PL. 5、13）

複数の盛土および整地土を除去すると、暗灰色土（4層、約10cm）、暗褐色混じり暗灰色土（5層、約15cm）が確認される。共に現代の耕作土である。以下、暗橙色礫混土（6層、約20cm）、淡褐色



第16図 下村遺跡、下村1号墳、新家古墳群、兎田遺跡調査区位置図

砂（7層、約10～40cm）、暗橙色礫混土（8層、約10～40cm）を経て淡褐色砂礫と（暗）淡褐色砂による互層が60cm以上続く。6層以下は自然堆積と捉えられるものであるが、淡褐色砂礫に角礫を少なからず含むことなどからすると、調査区は低位段丘縁辺の小規模な谷地形に属するものと考えることができる。いずれの層位からも遺物は出土せず、遺構も確認されなかった。



第17図 下村遺跡09-1区地形図

- 註 ① 泉南市教育委員会「下村遺跡92-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』（1993）
 ② 泉南市教育委員会「下村遺跡95-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XⅢ』（1996）
 ③ 泉南市教育委員会「下村遺跡02-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XX』（2003）
 ④ 泉南市教育委員会「下村遺跡01-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XⅨ』（2002）

第10章 下村1号墳の調査

第1節 既往の調査（PL. 1、2）

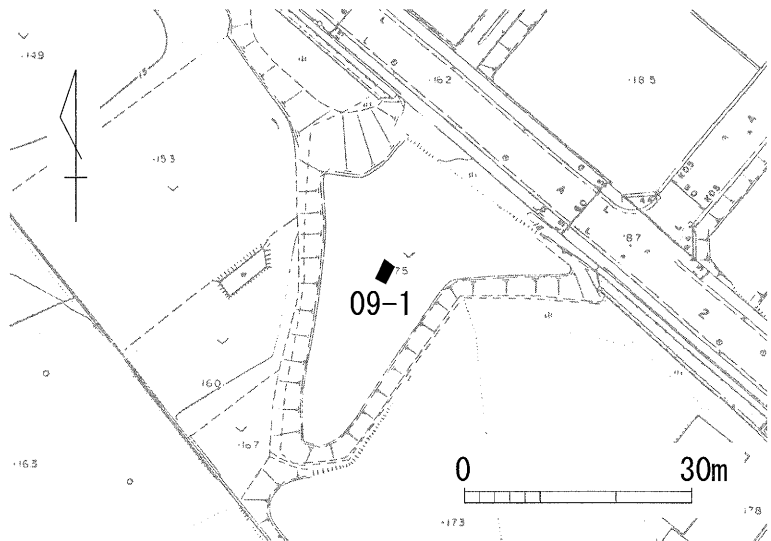
下村1号墳は市域北東部、基盤山地より北西方向へと伸びる檜井丘陵の北西端に位置する。同丘陵には尾根を違えていくつかの古墳群が分布することが知られている。下村1号墳の南約150m、同一尾根筋上に築かれた下村2号墳、北東部の尾根上には新家古墳群、さらに南東の尾根上にはフキアゲ山古墳、兎田古墳群が築かれている。下村古墳（群）に関しては、1号墳は1960年の分布調査により、直径8m、高さ1.5mの円墳として周知されるが、1970年には既に破壊されていたものとみえ、石室材とも考えられる砂岩や須恵器片のみが確認され、さらに同2号墳については1980年以前には既に数個の砂岩が残存するのみであったとされる^①。また下村2号墳の南東約100mに位置する新家オドリ山遺跡93-1区においては用途不明の溝^②が確認され、6世紀後半の須恵器が出土している。他に同一地点よりの採集品として6世紀代の須恵器^③が知られており、下村古墳群との関連より後期古墳の存在が指摘されている。

第2節 09-1区の調査

1. 位置（第16、18図）

調査区は下村1号墳として周知される範囲の北東に隣接する。新家楠台団地北西にある空地であり、市道新家楠台団地内線に東面し、私立砂川第二幼稚園の南西約100mに位置する。周辺は宅地開発等による改変が著しいが、本来は一帯が基盤山地より北西方向に向けて舌状に伸びる丘陵に含まれ、本調査区は丘陵西麓の北端部にあたるものである。

調査区は近年まで駐車場として利用されており、現況は碎石の敷かれた更地である。トレンチは1ヵ所設定した。



第18図 下村1号墳09-1区地形図

2. 層位と遺物の出土状況（PL. 5、14）

碎石による盛土（約20cm）を除去すると、さらに二層、約110cmにわたって造成に伴う盛土が存在する。盛土以下、旧耕作土である淡暗灰褐色シルト（4層、約15cm）、淡黄白色混じり淡灰白色砂質シルト（5層、約20cm）を経て、地山である淡黄白色砂へと至る。5層は盛土もしくは4層と地

山の攪拌層と考えられるものである。地山はいわゆる山砂である。地山直上に堆積層が全く見られないことから、調査区は既に削平されているものと考えられる。遺構、遺物は確認されなかった。

- 註 ① 西山要一『淡輪磯山古墳群』磯山古墳群調査会・摂河泉文庫（1980）
② 泉南市教育委員会「新家オドリ山遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X I』（1994）
③ 泉南市教育委員会「新家オドリ山遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X I』（1994）
山元 建「泉南市新家オドリ山遺跡採集の須恵器一資料について」『大阪文化財研究』第10号（財）大阪府文化財調査研究センター

第11章 新家古墳群の調査

第1節 既往の調査 (PL. 1、2)

新家古墳群は市域北東部、基盤山地より北西方向へと伸びる樫井丘陵の東縁尾根上に展開するものである。同丘陵上には尾根を違えて、北から下村1、2号墳、新家古墳群、フキアゲ山1、2号墳、兎田古墳群が分布しており、樫井川流域に居した集団の奥つ城であると考えられている。新家古墳群については本調査区の南東80mの地点より、さらに南東へと伸びる尾根上において6基の古墳が確認され^①、1970年、75年には大阪府教育委員会による発掘調査が実施されている。多くは既に削平されており詳細の明らかとなったものが少ないが、北から4、3、2号墳が隣接して築かれ、2号墳の南東約15mに1号墳、さらに1号墳の南東約30mに5、6号墳が位置する。墳形の判明する2、3号墳については直径10m、高さ1.5mを測る円墳であり、石室については1～5号墳は河原石積の竪穴式石室、6号墳のみ砂岩を用いた横穴式石室を有していた。3号墳、6号墳を中心とする出土遺物や石室主軸等によって、5世紀末から6世紀中葉にかけて2、3、1、5、6号墳の順で構築され



たものと考えられている。

本調査区はこうした既知の古墳より若干距離を隔てているが、1980年代に行われた造成工事によって大きく地形が改変されていること、さらに調査区の東隣接地を中心に須恵器や勾玉、鉄製品などが多く採集^⑧され、さらに東面する崖面より竪穴式石室の可能性が高い河原石積みが確認されるなどしており、本来は先に見た6基の古墳に連なる複数の古墳が分布していたものと考えられる。周辺での採集遺物には5世紀前半から中期に位置づけられる初期須恵器や紀北地域との関係を窺わせる資料^⑨が含まれており、注目される。

第2節 09－1区の調査

1. 位置（第16、19図）

調査区は新家古墳群として周知されている遺跡範囲の北西端にあつて、府道大阪和泉南線の北約60mに位置する。地形的には榎井丘陵の北東縁の尾根上、丘陵全体からみれば北東に張り出した尾根の北端部分にあたる。先にみたように、調査区を含む周辺において大規模な宅地開発や造成工事によって旧地形が大きく失われており、元来の丘陵地形を残すのは調査区南東に接する東麓部分のみとなっている。

現況は更地であり、南から北へと緩やかに傾斜する平坦地となっている。調査では古墳の存在はもとより、旧地形の残存状況の把握を目的として、全28カ所のトレンチを設定した。以下、遺物が出土した第19トレンチを中心に説明を加えることとする。

2. 層位と遺物の出土状況（PL. 6、14、15）

第1～第7トレンチは調査区北縁に設けたものである。第1、2トレンチでは表土、盛土の直下に地山である暗橙色混じり灰白色砂～粘土が認められるのに対し、第3～第7トレンチにおいては3～4m以上の盛土によって本来の地山は確認することができなかった。

第8～17トレンチは調査区東縁から西縁を取り囲むように設定したものである。いずれのトレンチにおいても約20～40cmの盛土直下に地山が確認された。

第18～28トレンチは調査区の中央、建築物が予定される地点を中心として設定したものである。これらのうち第20、28トレンチを除く地点において、地山が急激に落ち込む様子が確認された。中でも第21、24トレンチについては完全に落ち込みの中に含まれているものと考えられ、本来の地山はまったく確認することができなかった。

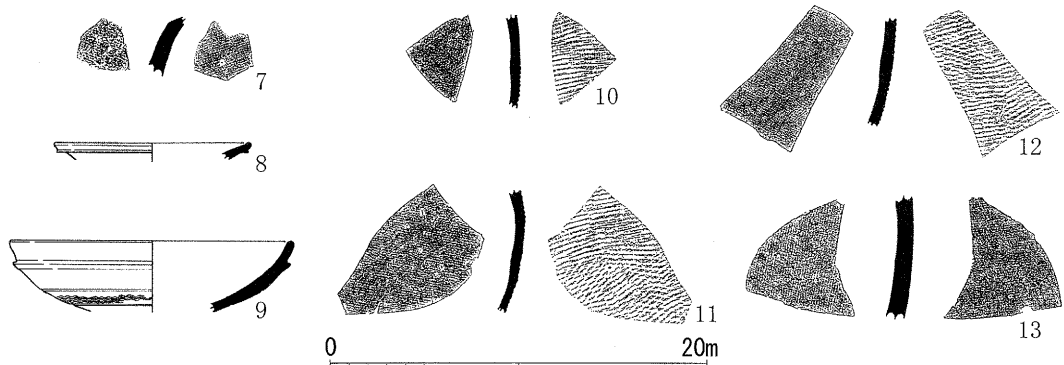
各トレンチの状況を総じて判断すると、落ち込みは調査区北東隅より発し、第23トレンチ付近を頂点とし、さらに北西方向へと抜ける大きな三角形を呈するものと考えられ、かつて存在した谷地形が顕になったものと判断して間違いはないだろう。第3～7トレンチにおける数mに及ぶ盛土は谷地形を埋立てたものと判断される。

第19トレンチにおいて、盛土直下に不自然な河原石群が確認されたため、トレンチを拡張しその全容の把握に努めた。結果、これらの河原石群は地山直上に堆積した粘土層に含まれていること、粘土層はその状況から自然堆積によるものと判断されること、上面に表土層が形成されていることか

ら、粘土層が一定期間地表面を成していたことなどが判明した。河原石は 50 個以上確認され、直径 20 ～ 30cm を測るものが多い。トレンチの南半部、さらに確認面より－ 30 cm までに集中していた。河原石の周囲から古墳時代の須恵器が出土した。これらの状況により、河原石群は東側の丘陵上部にかつて存在した古墳石室の構築材であったものと考えられ、恐らくは自然発生的に丘陵が崩落し、谷斜面に二次堆積したものであると判断されるものである。出土した須恵器に関しては同古墳の副葬品であった可能性が極めて高いものと考えられる。

3. 遺物 (PL. 16、第 20 図)

第 19
トレンチ
より出土
したもの
を全点図
示した。
いずれも
須恵器で
あるが、
全体の判



第 20 図 新家古墳群出土遺物

るものはない。7 は高杯脚部と考えられる。外面がナデによって平滑に仕上げられている。現状では透かし等の有無は不明である。8 は小型甕の口縁部である。外反する口頸部を有し、口縁端部は上方へとつまみ上げ、丸く収める。外面の端部直下には断面三角形の突帯が巡る。9 は高杯杯部と考えられる。内湾気味の体部より、外傾しつつ直線的に立ち上がる口縁部を持つ。口縁端部は平坦面をなす。口縁部と体部の境界に断面三角形の突帯が巡る。体部下方には沈線によって区画された波状文帯が巡る。10 ～ 13 は甕の体部である。10、11 は同一個体であり、12 についてもその可能性が高い。外面には不定方向の平行タタキ、内面はスリ消しが施される。13 は前者に比べて若干器壁が厚く、内外面に共に丁寧なスリ消しが施されている。以上、いずれも小片であって明確な時期決定は難しいが、概して I 形式の範疇に収まっており、5 世紀中葉から後半に属するものと考えられる。

註 ① 堀田啓一「考古編」『泉南市史 史料編』泉南市 (1982)

堀田啓一「考古・古代」『泉南市史 通史編』泉南市 (1987)

西山要一『淡輪磯山古墳群』磯山古墳群調査会・摂河泉文庫 (1980)

② 1980 年代、市民により採集、確認された。石室らしき石積は本調査区第 8 トレンチの北約 10 m の地点である。

③ 藤田正篤・森昌俊・富田博之・三辻利一「新家オドリ山丘陵で発見された初期須恵器について」『泉佐野市史研究第 6 号』泉佐野市史編さん委員会 (2000)

第12章 兎田遺跡の調査

第1節 既往の調査（PL. 1、2）

兎田遺跡は市域平野部の南東隅に位置する。遺跡の中央から東半に現兎田集落が立地し、東端は櫛井川河道と接する。遺跡の西側は耕作地として利用されている。

地形的には櫛井丘陵の東縁を縫って形成された櫛井川左岸の沖積地に立地する。大半を沖積段丘が占めるが、遺跡の北東部に旧河道が、南西隅には新家古墳群や兎田古墳群が立地する丘陵を含む。

これまでに遺跡の中央部分にあたる現集落西半部を中心として10数件の調査が行われている。集落の初源を中世と考える遺物包含層のほか、ピットなどの遺構^⑨が確認されている。またほとんどの地点において砂礫を基盤層とすることが明らかとなっており、安定した段丘面が確認される地点は今のところ極めて限定的である。

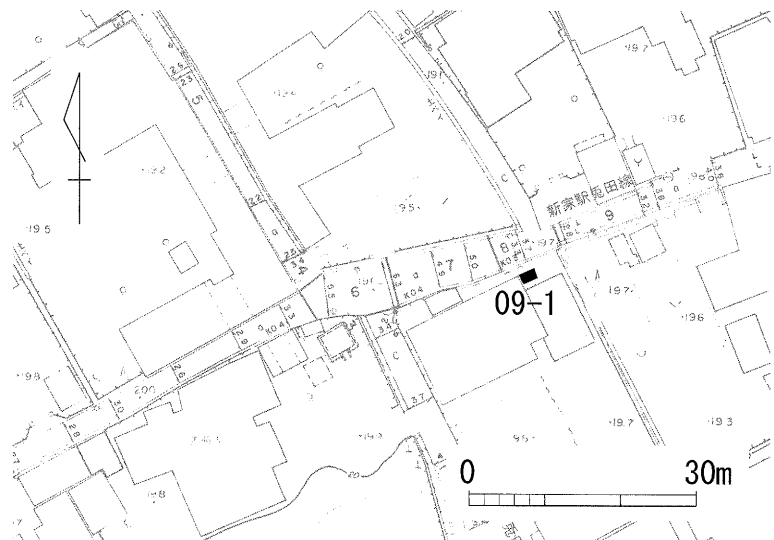
第2節 09－1区の調査

1. 位置（第16、21図）

調査区は遺跡の南東部にあって、現集落の中央南端に位置する。地形的には櫛井川左岸の沖積段丘に属する。周辺では南西約60mに06-1区が位置し、中世遺物包含層と遺構ベースとなり得る安定面が確認されている^⑩。現況は更地であり、トレンチは1ヵ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 （PL. 5、15）

盛土（1層、約60cm）以下、褐色混じり淡灰褐色シルト（2層、約10cm）、橙色砂質シルト（3層、約10cm）、灰褐色混じり淡褐色砂質土（4層、約15cm）と続き、淡黄褐色砂（5層、約20cm）、暗黄灰色砂（6層、約10～30cm）を経て地山である暗灰褐色礫混砂へと至る。2、3層は現代耕作土および床土、4層は旧耕作土である。4層はトレンチ北端にのみ存在し、大半の地点では3層直下に5層が広がっている。5層以下はそれぞれ上面にわずかな起伏を伴い、いささか不安定な堆積状況を示す。また6層は東から西へと緩やかに傾斜する地山面上に堆積しており、西に向かって層厚を増す。地山は河川性堆積による砂礫層であり、調査区が氾濫原に属することが明らかである。地山上面において精査を行ったが遺構は確認されず、いずれの層位からも遺物は出土しなかった。

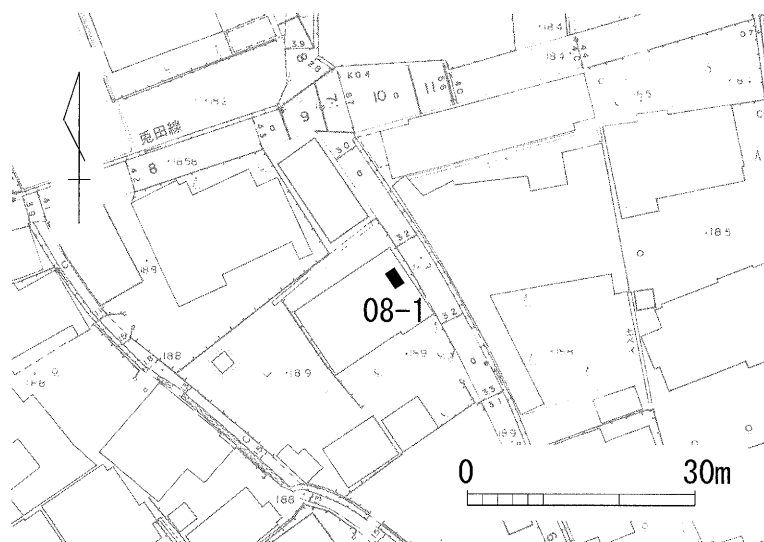


第3節 08－1区の調査

1. 位置（第16、22図）

調査区は遺跡の中央、現集落の北西部に位置する。地形的には樫井川左岸の沖積段丘上に属するものと考えられるが、周辺においても安定した段丘面はほとんど確認されていない。調査区の南隣接地に96-1区、北西約50mには07-1区が位置する。96-1区では近世の雨落ち溝やピット^③が、07-1区では中世の遺物包含層^④が確認されている。

現況は更地であり、トレンチは1ヵ所設定した。



第22図 兎田遺跡 08-1区地形図

2. 層位と遺物の出土状況（PL. 5、15）

今般の住宅建設に伴う盛土（1層）および攪乱（2層）、さらに下層の盛土（3層）を除去すると、以下、明橙色土（4層、約15cm）、橙色混じり灰褐色砂質土（5層、約20cm）、褐灰色砂質土（6層、約10～30cm）と続き、淡褐色礫混土へと至る。4層～6層はいずれも水平堆積をみせるもので、4層は近現代の床土、5、6層は旧耕作土と考えられる。最下層である淡褐色礫混土は氾濫原を構成するものと考えられ、拳大～人頭大の円礫を多く含み、南西から北東方向へ緩やかに傾斜している。同層および6層上面で精査を行ったが遺構は確認されなかった。また遺物は6層より中世と思しき土師器細片がわずかに出土しているが、図化し得ず、詳細は不明である。

註 ① 泉南市教育委員会「兎田遺跡 95-1、2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』（1996）

② 泉南市教育委員会「兎田遺跡 06-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XXIV』（2007）

③ 泉南市教育委員会「兎田遺跡 96-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』（1998）

④ 泉南市教育委員会「兎田遺跡 07-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XXV』（2008）

第13章 まとめ

本書では、平成21年1月1日より同12月31日までの間、文化財保護法に基づく届出等に基づいて行われた個人住宅等に伴う発掘調査および確認調査、19件について報告している。以下にこれらの調査成果を概観し、今年度のまとめとしたい。

男里遺跡では今年度5件の調査を実施し、昨年度末報告の1件を合せて報告している。09-1区は遺跡南端に位置する。近年、周辺では弥生時代を中心とする調査成果の蓄積が進んでおり、今回もその実体が注目された。調査では北東から南西方向へと調査区を横断する溝（SD01）が確認された。比較的規模が大きく、その用途や性格が注目されるものであるが、埋土の状況より水路であったとは考え難く、関連する他の遺構についてもまったく確認されなかったため、機能に関しては不明であると言わざるを得ない。また遺物量が非常に少なく、僅か1点のみ9世紀代と考えられる遺物が出土しているものの、明確な時期決定には至らなかった。SD01に関連する可能性のあるものとして、北約200mに位置する府道金熊寺男里線建設に伴う調査における「大溝5」が挙げられる^①。大溝5は検出長45m、幅3～6m、深さ70cmを測る南北溝であり、埋土より7～10世紀代の遺物が出土している。SD01と遺構規模や埋土の状況が近似し、さらに出土遺物が時期的に重複することなどから、両者の関連が注目されるものである。09-2、09-3区は遺跡南東部、現馬場集落近隣における調査であった。09-2区ではピットが確認された。単独での検出であるため性格は不明であるが、柱痕跡を留め、さらに根石を伴っていることからして、掘立柱建物等を構成するものとみてよいだろう。僅かではあるが古墳時代と考えられる遺物が出土していることから、周辺に同時代の集落が存在する可能性がある。09-3区では安定したシルト面よりなる地山と複数の遺物包含層が確認された。うち下層の包含層から弥生土器の可能性のある遺物が出土している。調査区周辺では中世の遺構、遺物は散見されるものの、弥生時代に属する資料は今のところ知られておらず、今後の展開が注目されるものである。09-4区は遺跡北東部に位置する。中世遺物包含層である旧耕作土が良好に残存していること、さらに男里遺跡北部に特徴的に分布する黒褐色系土層の存在が確かめられた。遺構が確認されなかったことにより、耕地開発以前の土地利用が活発でなかったことが明らかとなった。09-5区は遺跡北西部における調査である。周辺では既往の調査例が少なく本調査成果が期待されたが、分厚い盛土以下に現代の耕作土を認めるに留まり、遺構や遺物は確認されなかった。08-9区は現男里集落のほぼ中央に位置する。遺構は確認されなかったが、地山直上に堆積した焼土層は生活面の存在を強く匂わすものであり、遺物包含層の在り方よりみて中世に属する可能性が高いものと考えられるものであった。

光平寺跡では1件の調査を報告している。隣接地において鎌倉時代の掘立柱建物等が確認^②されていることからその成果が期待されたものであったが、河川性堆積による不安定な地山が明らかとなり、積極的な土地利用を成しにくかったものと推測されるに至った。しかしながら地山直上に施された整地層に中世遺物が多く含まれていることから、近隣における中世集落、ひいては光平寺の広がりを知る貴重な手掛りを得ることができたものといえよう。

幡代遺跡では遺跡中央部における1件の調査を報告している。氾濫原に属する地山が確認されたことで、より詳細な旧地形を復元するためのデータを蓄積することができた。

長山遺跡では昨年度末報告分の1件を報告している。現馬場集落に隣接する中世以降の生産地との

評価があるなか、初めての集落近接地での調査であった。遺構は確認されなかったものの、地山直上に遺物包含層の可能性が高い堆積が確認され、周辺での遺構確認が期待されることとなった。

坊主池遺跡では互いに隣接する3件の調査を報告している。09-1区では複数の耕作面が確認され、中世以降、連綿と耕作地として活用されていることが明らかとなった。北東に隣接する09-2、3区においては、現代耕作土の直下に地山が露呈するという異なる調査結果が得られた。09-1区において東から西にむかっての旧地形の傾斜が指摘できることから考えると、09-2、3区周辺が微高地上に立地することを推測しうる結果が得られたといえよう。

大苗代遺跡では遺跡西端部における1件の調査を報告している。段丘を構成する粘土層の地山が確認された。北野遺跡や仏性寺跡といった周辺に分布する遺跡群に共通のものであるが、粘性がさほど強くないという相違点が指摘される。こうした差異が局所的なものか、一定の広がりを持つものかを見極める必要がある。

海宮宮池遺跡では1件の調査を報告している。非常に硬く締まった現代の堤体盛土が確認され、現在見られる池の形は、近年の堤体拡大によるものであることが確かめられた。

下村遺跡では1件の調査を報告している。砂礫と砂による互層が確認され、段丘縁辺の小規模な谷地形に立地するものと考えられ、地形的制約によって北に隣接する95-1区^②における弥生時代や中世の遺構、遺物の広がりには本調査区までは至っていないことが判明した。

下村1号墳では初めての本格的な発掘調査が行われた。調査区はかなりの削平を受けていることが明らかとなり、古墳の存在を伺わせるものは何も確認されなかった。1960年代とされる下村1号墳の破壊と同時期の所作によるものであろうか^③。

新家古墳群では丘陵先端部における調査であった。調査の結果、既に丘陵部が大きく削平されていること、さらに谷地形についても埋め立てられていることが明らかとなった。造成に際して多くの資料が採集されている^④ことからすると、削平された丘陵斜面に未知の古墳が存在した可能性は極めて高い。また調査によって確認された河原石群や遺物は、石室材や副葬品であることは間違いのないものと考えられるが、それらは自然発生的に起った丘陵斜面の崩壊によって破壊され、崩落土と共に二次堆積したものと判断されるものであった。こうしたことから周辺、特に調査区東側の尾根上にはさらに多くの古墳が存在していたことが確実であるものといえ、新家古墳群、また周辺に分布する他の古墳群の消長を明らかにするうえで、非常に重要な成果が得られた。

兎田遺跡では昨年度未報告分を含め2件の調査を報告している。09-1区では氾濫原に属する地山と直上に堆積した砂層が確認され、旧地形の一端を知ることができた。08-1区においては、旧耕作土より中世と考えられる遺物がわずかに出土している。これまでの調査成果と合わせて、調査区より北西方向への遺物包含層の広がりが想定できることとなった。

註 ① (財)大阪府文化財センター『男里遺跡』(2005)

② 泉南市教育委員会「55-1地区」『男里遺跡発掘調査報告書Ⅱ』(1981)

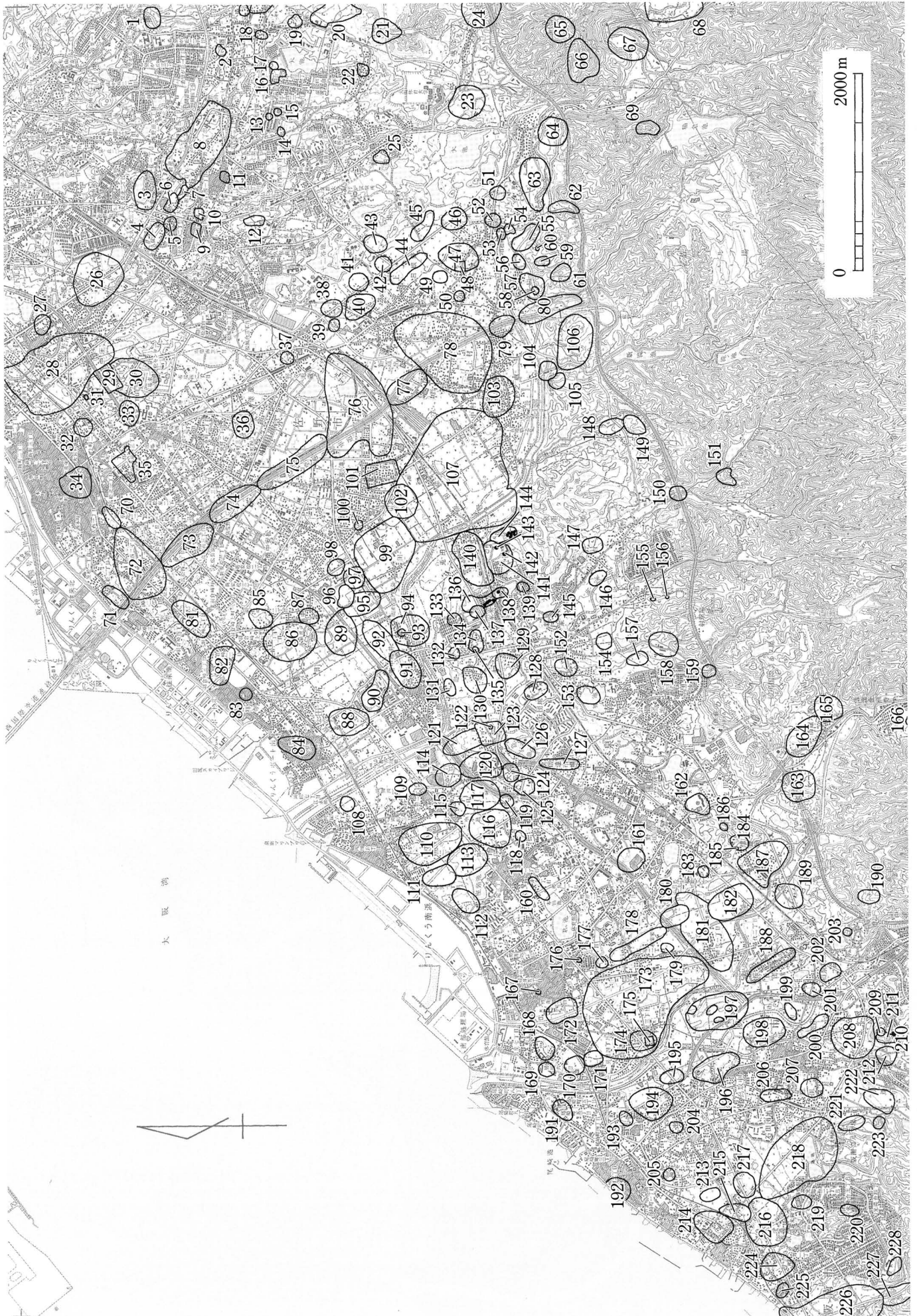
③ 泉南市教育委員会「下村遺跡95-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XⅢ』(1996)

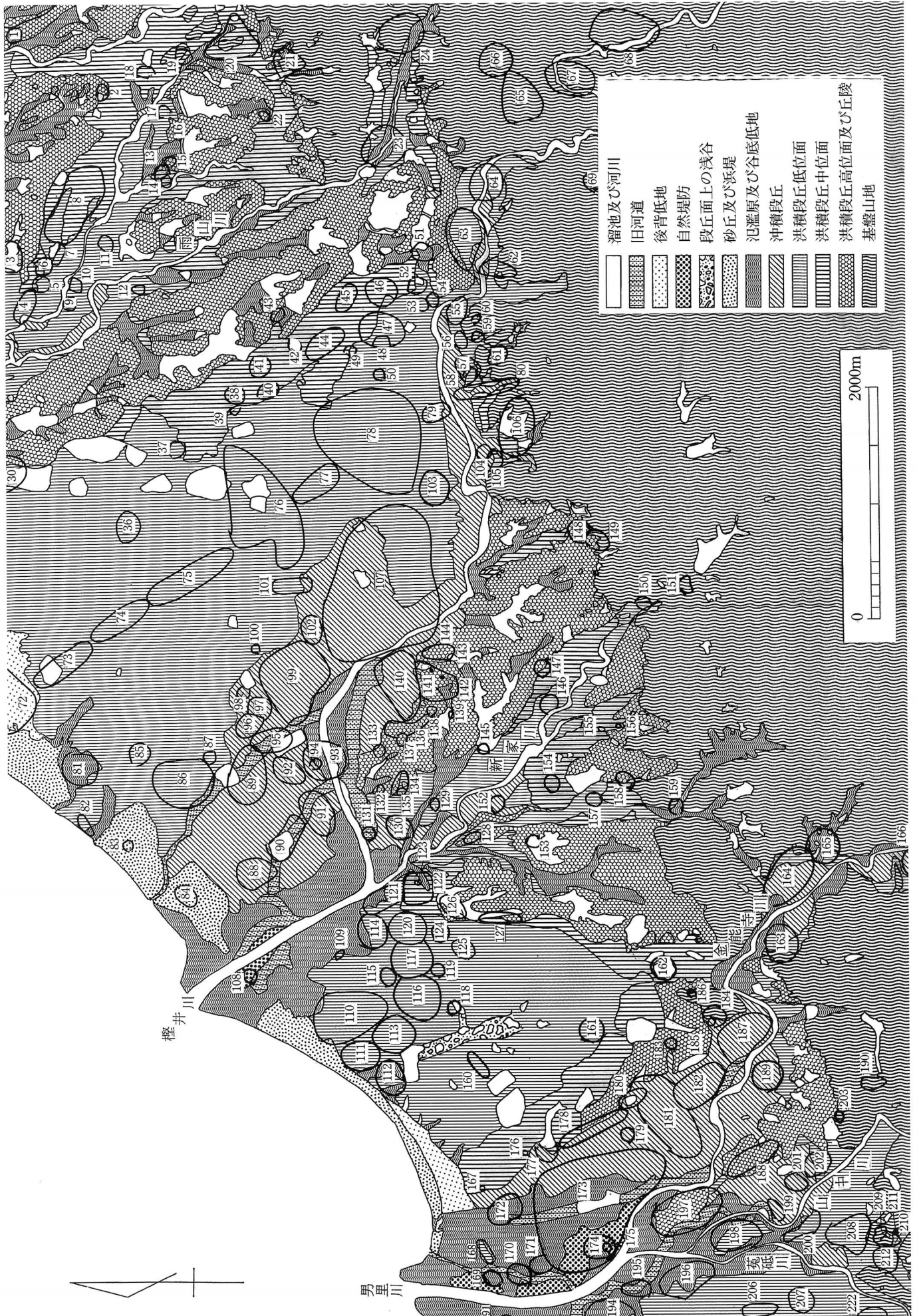
④ 西山要一『淡輪磯山古墳群』磯山古墳群調査会・摂河泉文庫(1980)

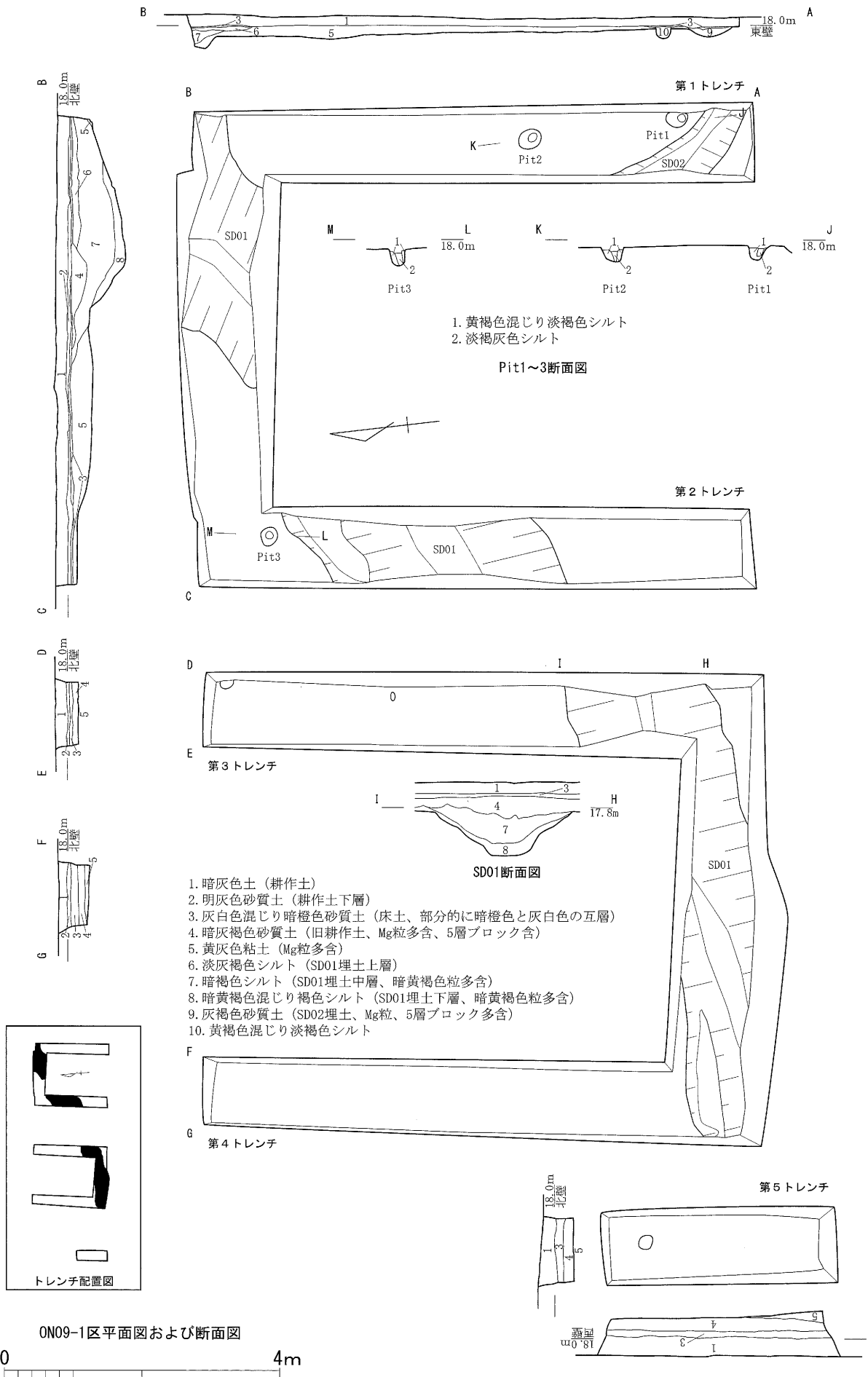
⑤ 藤田正篤・森昌俊・富田博之・三辻利一「新家オドリ山丘陵で発見された初期須恵器について」『泉佐野市史研究第6号』泉佐野市史編さん委員会(2000)

第5表 文化財一覧表

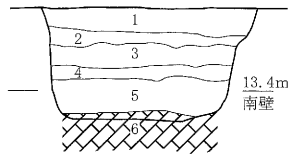
1	正法寺跡	47	野々宮遺跡	93	榎井城跡	139	引谷池窯跡	185	林昌寺瓦窯跡
2	小垣内遺跡	48	総福寺天満宮本殿	94	奥家住宅	140	兎田遺跡	186	林昌寺銅鐸出土地
3	大谷池遺跡	49	宮ノ前遺跡	95	道ノ池遺跡	141	フキアゲ山東遺跡	187	岡中遺跡
4	大久保B遺跡	50	垣外遺跡	96	岡ノ崎遺跡	142	フキアゲ山1号墳	188	高田山古墳群
5	下高田遺跡	51	屯田遺跡	97	中菖蒲遺跡	143	フキアゲ山2号墳	189	岡中西遺跡
6	紺屋遺跡	52	八王子遺跡	98	岸ノ下遺跡	144	兎田古墳群	190	雨山南遺跡
7	口無池遺跡	53	慈眼院金堂・多宝塔	99	諸目遺跡	145	池尻遺跡	191	福島遺跡
8	東円寺跡	54	日根神社遺跡	100	城ノ塚古墳	146	中の川遺跡	192	尾崎海岸遺跡
9	降井家屋敷跡	55	西ノ上遺跡	101	禅興寺跡	147	岩の前遺跡	193	馬川北遺跡
10	大久保C遺跡	56	川原遺跡	102	ダイジョウ寺跡	148	別所北遺跡	194	馬川遺跡
11	中家住宅	57	母山遺跡	103	上之郷遺跡	149	別所遺跡	195	下出北遺跡
12	大久保A遺跡	58	母山近世墓地	104	向井代遺跡	150	高野遺跡	196	室堂遺跡
13	五門北古墳	59	向井山遺跡	105	意賀美神社本殿	151	昭和池遺跡	197	平野寺（長楽寺）跡
14	五門遺跡	60	鏡塚古墳	106	向井池遺跡	152	上村遺跡	198	向出遺跡
15	五門古墳	61	梨谷遺跡	107	三軒屋遺跡	153	狐池遺跡	199	高田西遺跡
16	大浦中世墓地	62	笹ノ山遺跡	108	川原遺跡	154	上野中道遺跡	200	向山遺跡
17	大浦遺跡	63	土丸遺跡	109	岡田東遺跡	155	宮遺跡	201	高田南遺跡
18	甲田家住宅	64	土丸南遺跡	110	岡田遺跡	156	宮南遺跡	202	和泉鳥取遺跡
19	久保B遺跡	65	雨山城跡	111	氏の松遺跡	157	芋掘遺跡	203	雨山遺跡
20	鳥羽殿城跡	66	土丸城跡	112	座頭池遺跡	158	石ケ原遺跡	204	内畑遺跡
21	墓の谷遺跡	67	下大木遺跡	113	岡田西遺跡	159	高倉山南遺跡	205	皿田池古墳
22	来迎寺本堂	68	大木遺跡	114	新伝寺遺跡	160	本田池遺跡	206	正方寺遺跡
23	池ノ谷遺跡	69	稲倉池北方遺跡	115	中小路北遺跡	161	上代石塚遺跡	207	西畑遺跡
24	成合寺遺跡	70	大西遺跡	116	中小路西遺跡	162	信之池遺跡	208	自然田遺跡
25	山ノ下城跡	71	松原遺跡	117	中小路遺跡	163	滑瀬遺跡	209	玉田山遺跡
26	山出遺跡	72	中開遺跡	118	坊主池遺跡	164	六尾遺跡	210	玉田山古墳群
27	上瓦屋遺跡	73	末廣遺跡	119	中小路南遺跡	165	六尾南遺跡	211	玉田山須恵器窯跡
28	湊遺跡	74	安松遺跡	120	北野遺跡	166	金熊寺遺跡	212	寺田山遺跡
29	壇波羅密寺跡	75	長滝遺跡	121	一岡神社遺跡	167	専徳寺遺跡	213	黒田西遺跡
30	壇波羅遺跡	76	植田池遺跡	122	海会寺跡	168	天神ノ森遺跡	214	鳥取北遺跡
31	佐野王子跡	77	郷ノ芝遺跡	123	海会寺瓦窯	169	キレト遺跡	215	鳥取遺跡
32	上町東遺跡	78	日根野遺跡	124	大苗代遺跡	170	高田遺跡	216	鳥取南遺跡
33	市場東遺跡	79	机場遺跡	125	仏性寺跡	171	男里北遺跡	217	黒田南遺跡
34	若宮遺跡	80	棚原遺跡	126	海宮宮池遺跡	172	戎畑遺跡	218	神光寺（蓮池）遺跡
35	上町遺跡	81	羽倉崎東遺跡	127	市場遺跡	173	男里遺跡	219	三味谷遺跡
36	俵屋遺跡	82	羽倉崎遺跡	128	向井山遺跡	174	光平寺跡	220	三升五合山遺跡
37	北尻遺跡	83	嘉祥神社本殿	129	新家遺跡	175	光平寺石造五輪塔	221	小口谷遺跡
38	岡口遺跡	84	道ノ池遺跡	130	下村遺跡	176	樺井南遺跡	222	井関遺跡
39	中嶋遺跡	85	羽倉崎上町遺跡	131	下村北遺跡	177	男里東遺跡	223	石田山遺跡
40	小塚遺跡	86	船岡山遺跡	132	下村1号墳	178	長山遺跡	224	西鳥取遺跡
41	十二谷遺跡	87	岡本廃寺	133	新家オドリ山東遺跡	179	山ノ宮遺跡	225	戎遺跡
42	丁田遺跡	88	田尻遺跡	134	新家オドリ山遺跡	180	前田池遺跡	226	貝掛遺跡
43	新池尻遺跡	89	船岡山南遺跡	135	下村2号墳	181	幡代遺跡	227	金剛寺遺跡
44	大坪遺跡	90	夫婦池遺跡	136	新家古墳群	182	幡代南遺跡	228	塚谷古墳群
45	市堂遺跡	91	榎井西遺跡	137	新家オドリ山南遺跡	183	奥ノ池遺跡		
46	北ノ前遺跡	92	藤波遺跡	138	フキアゲ山西遺跡	184	林昌寺跡		





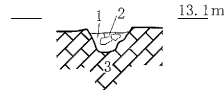


PL. 4 男里遺跡②、光平寺跡、幡代遺跡、長山遺跡調査区



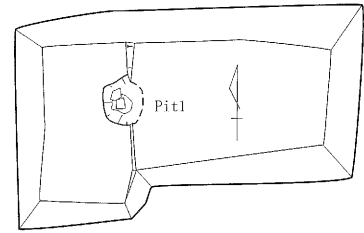
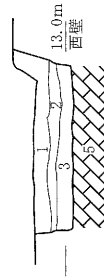
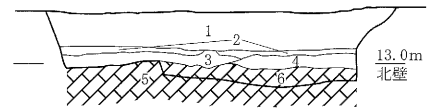
1. 表土及び盛土
2. 暗灰色土（耕作土）
3. 黄灰色砂質シルト
4. 淡褐色灰質礫混シルト
5. 暗褐色礫混シルト
6. にぶい暗黄褐色礫混シルト

ON09-3区断面図



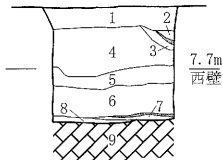
1. にぶい黄褐色混じり淡暗褐色シルト
2. 淡褐色混じり灰褐色シルト
3. にぶい黄褐色礫混シルト

ON09-2区Pit1断面図



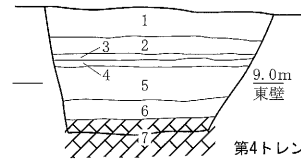
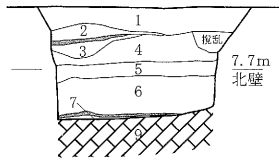
1. 灰黒色土（耕作土）
2. 淡褐色混じり明灰色砂質土
3. 淡褐色礫混シルト
4. 暗褐色礫混シルト
5. にぶい黄褐色礫混シルト
6. 明褐色砂礫

ON09-2区平面図および断面図



1. 盛土
2. 暗黄灰色土（焼土坑埋土）
3. 暗灰色炭混土（焼土坑埋土）
4. 淡黄灰褐色土
5. 淡灰褐色土
6. 淡褐色混じり灰褐色土
7. 暗赤褐色土（焼土）
8. 淡黄褐色土
9. 灰褐色砂礫

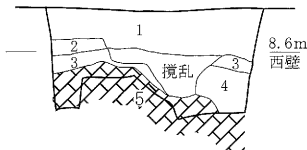
ON08-9区断面図



第4トレンチ

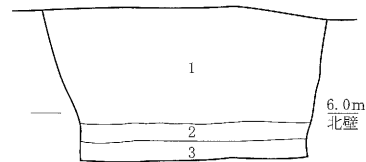
1. 盛土
2. 灰黒色土（耕作土）
3. 淡灰白色砂質土
4. 暗褐色混じり淡灰褐色砂質土
5. 淡褐色灰質砂質土
6. 暗褐色シルト
7. にぶい黄褐色シルト

ON09-4区断面図



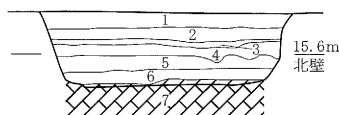
1. 盛土
2. 灰黒色シルト（耕作土）
3. 淡褐色砂質土
4. 褐色混じり淡褐色礫混土
5. 褐色砂礫

KH09-1区断面図



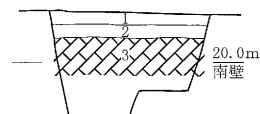
1. 盛土
2. 暗灰色土
3. 暗灰色砂質土

ON09-5区断面図



1. 淡灰白色土（耕作土）
2. 暗褐色混じり灰褐色土
3. 暗褐色土
4. 褐色混じり灰褐色砂質土
5. 暗褐色混じり灰褐色砂質土
6. 暗褐色砂質シルト
7. にぶい暗黄色シルト

NG08-1区断面図

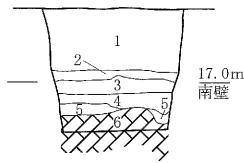


1. 灰黒色シルト（耕作土）
2. 暗褐色灰質砂質シルト
3. 淡褐色礫

HT09-1区断面図

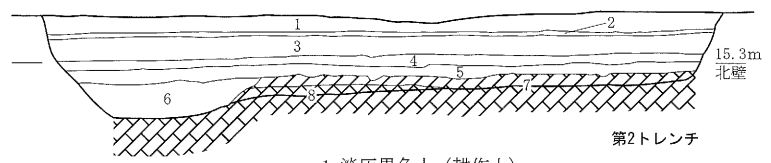


PL.5 坊主池遺跡、大苗代遺跡、海宮宮池遺跡、下村遺跡、下村1号墳、兎田遺跡調査区



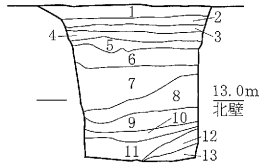
1. 盛土
2. 灰黒色シルト (耕作土)
3. 灰褐色混じり黄橙色土
4. 灰褐色シルト
5. 黄灰色礫混粘土
6. 橙色礫混土

ONS09-1区断面図



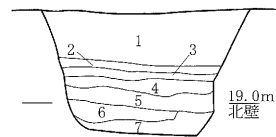
1. 淡灰黒色土 (耕作土)
2. 暗橙色土
3. 暗黄灰色砂質シルト
4. 淡暗褐色灰色砂質土
5. 暗黄褐色混じり灰褐色土
6. 暗灰褐色砂質シルト
7. 黄灰色粘土
8. 暗黄褐色礫混土

BZ09-1区断面図



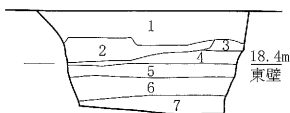
1. 盛土①
2. 盛土②
3. 黄白色混じり暗灰色土
4. 暗灰色土 (耕作土)
5. 暗褐色混じり暗灰色土 (耕作土)
6. 暗橙色礫混土
7. 淡褐色砂
8. 暗橙色礫混土
9. 淡褐色砂礫
10. 暗淡褐色砂
11. 淡褐色砂礫
12. 淡褐色砂
13. 淡褐色砂礫

SMO9-1区断面図



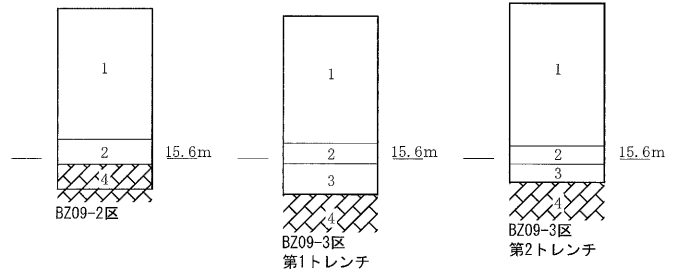
1. 盛土
2. 褐色混じり淡灰褐色シルト (耕作土)
3. 橙色砂質シルト
4. 灰褐色混じり淡褐色砂質土
5. 淡黄褐色砂
6. 暗黄灰色砂
7. 暗灰褐色礫混砂

US09-1区断面図



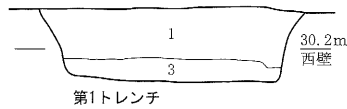
1. 盛土
2. 盛土 (攪乱)
3. 盛土
4. 明橙色土
5. 橙色混じり灰褐色砂質土
6. 褐灰色砂質土
7. 淡褐色礫混土

US08-1区断面図

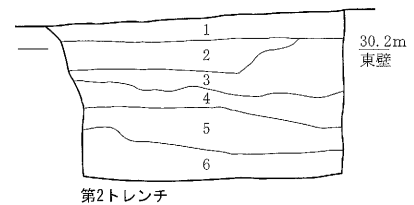


1. 盛土
2. 暗灰色土 (耕作土)
3. 灰色混じり暗褐色土
4. 暗黄褐色混じり灰色粘質土

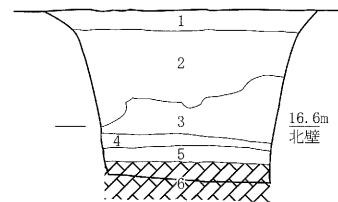
BZ09-2、3区土層柱状図



1. 淡黄灰色土 (表土)
2. 淡灰褐色混黄灰色粘土
3. 灰白色混明橙色粘土
4. 黄灰色土
5. 黄灰色砂質土
6. 黄灰色混じり淡青灰色粘土



KG09-1区断面図



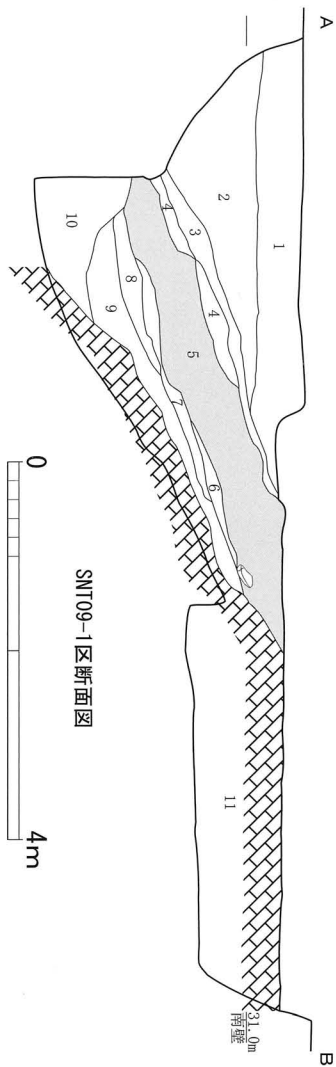
1. 盛土①
2. 盛土②
3. 盛土③
4. 淡暗灰褐色シルト (耕作土)
5. 淡黄白色混じり淡灰白色砂質シルト
6. 淡黄白色砂

SMT-109-1区断面図





SNT09-1区平面図



SNT09-1区断面図

1. 盛土
2. 灰黒色土 (耕作土)
3. 黒色土 (旧表土、植物根多含)
4. 黄灰色粘土
5. 暗灰白色粘土
6. 淡灰白色粘土
7. 灰黄色砂質土
8. 黄灰色混灰白色粘土
9. 暗褐色混灰白色粘土
10. 暗青灰色粘土
11. 黄灰色砂



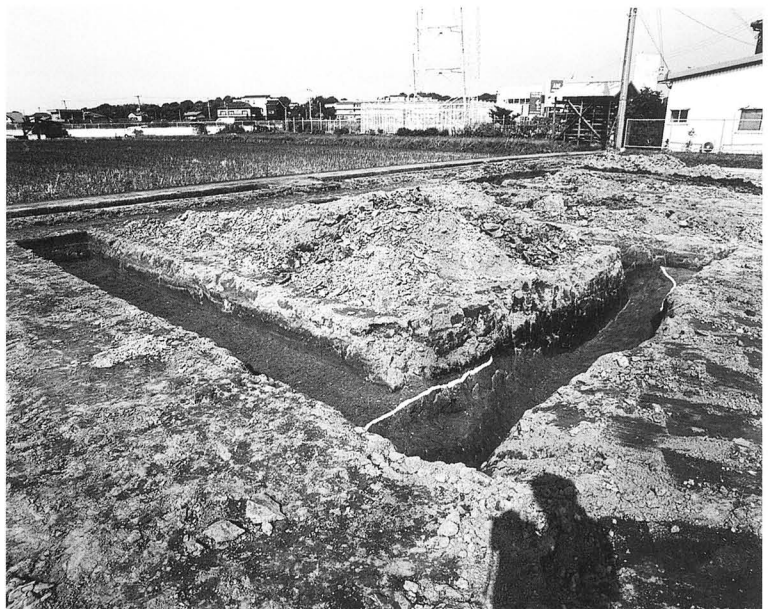
全景
(北東から)



第1、2トレンチ
(北西から)

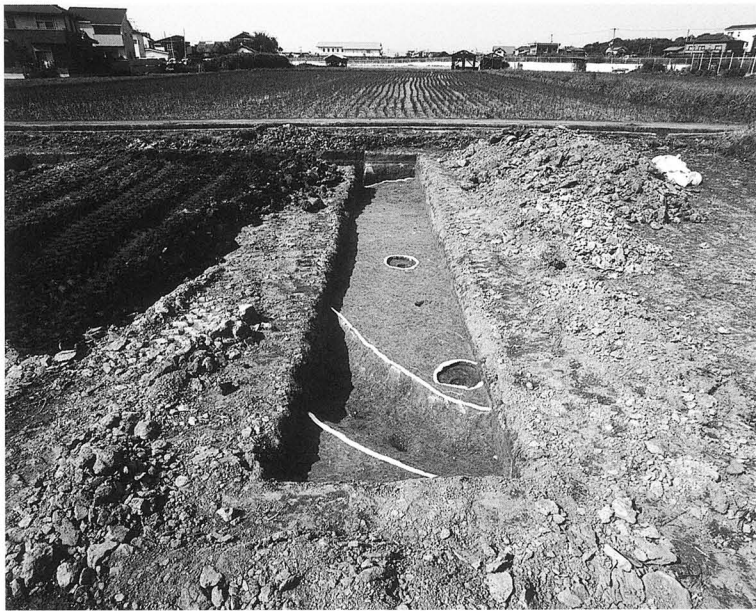


第3、4トレンチ
(南西から)

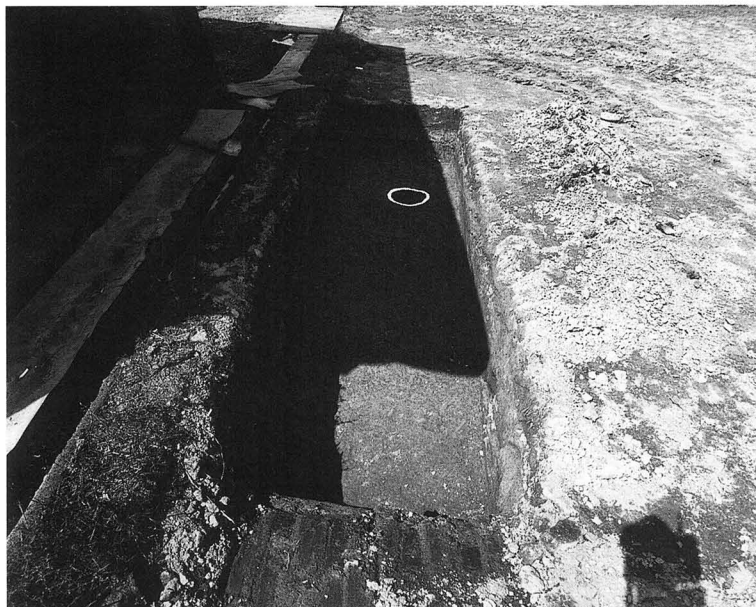




第2、3トレンチ
(北から)



第1トレンチ
(南から)



第5トレンチ
(南から)

ON 09 - 2区
(南東から)



同上 Pit01
(東から)



ON 09 - 3区
(北西から)





ON 09-4区 第4トレンチ
(北西から)

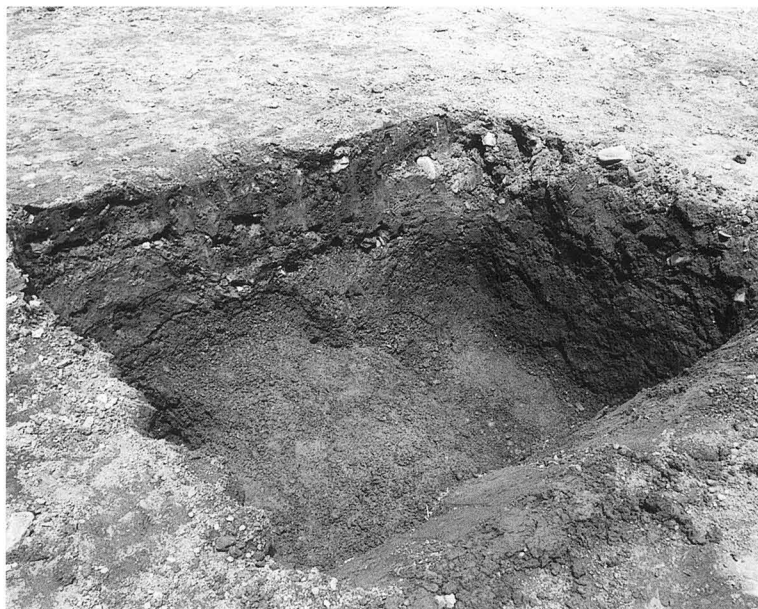


ON 09-5区
(西から)



ON 08-9区
(南東から)

KH 09-1 区
(南東から)

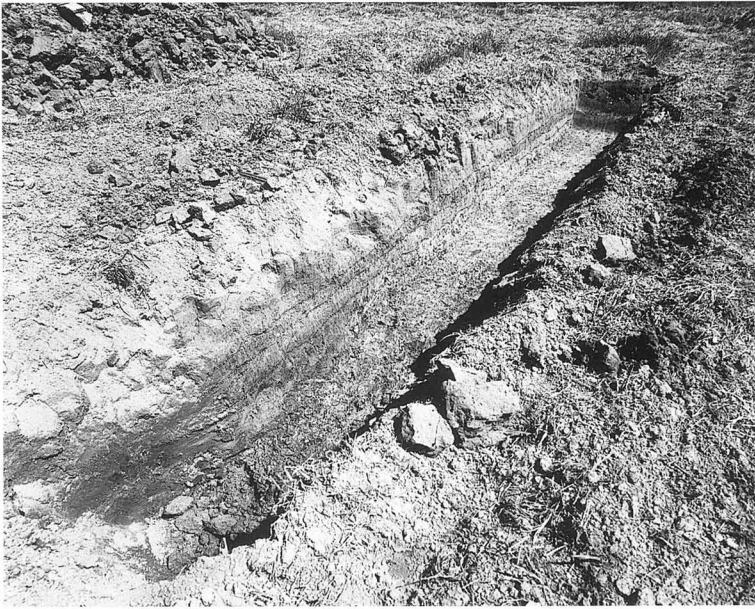


HT 09-1 区
(南から)



NG 08-1 区
(南東から)





BZ 09-1区 第2トレンチ
(南西から)



BZ 09-2区
(南東から)



BZ 09-3区 第2トレンチ
(東から)

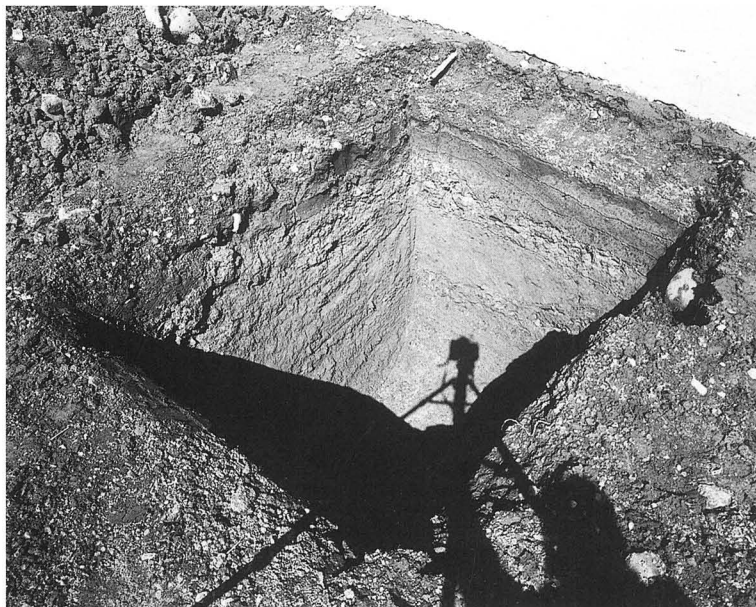
ONS 09-1 区
(北東から)



KG 09-1 区 第2トレンチ
(南西から)



SM 09-1 区
(南東から)





SMT -1 09 - 1 区
(南西から)



SNT 09 - 1 区 第 19 トレンチ
(南西から)

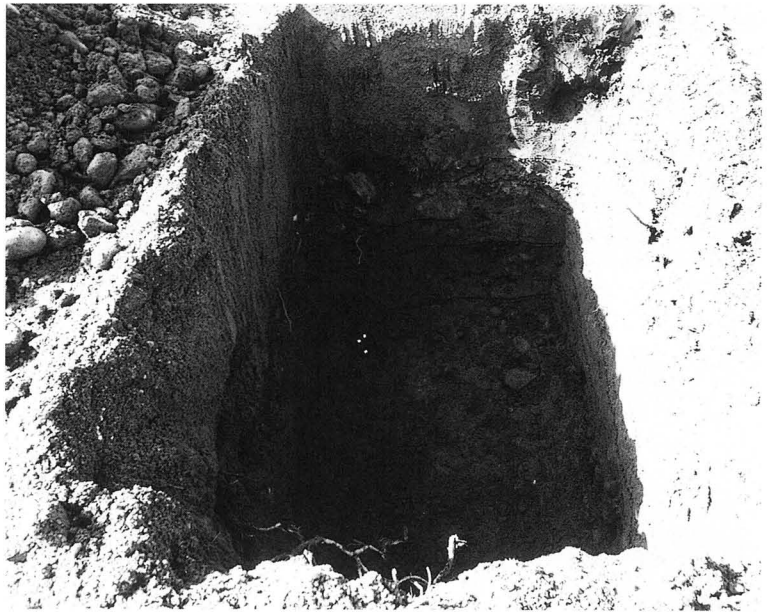


同上 集石検出状況
(北東から)

SNT 09-1 区 第19トレンチ
土層堆積状況（北東から）

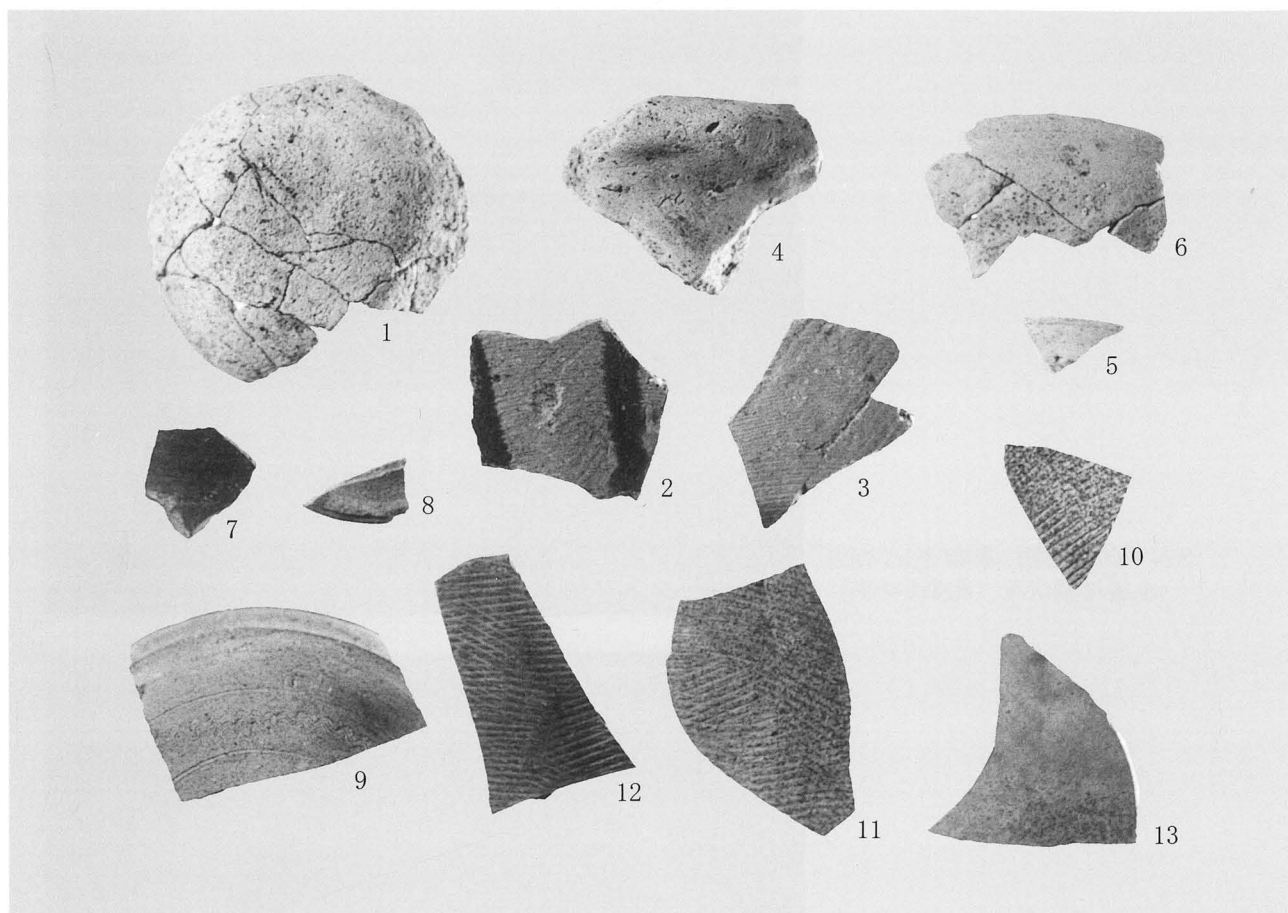


US 09-1 区
（東から）

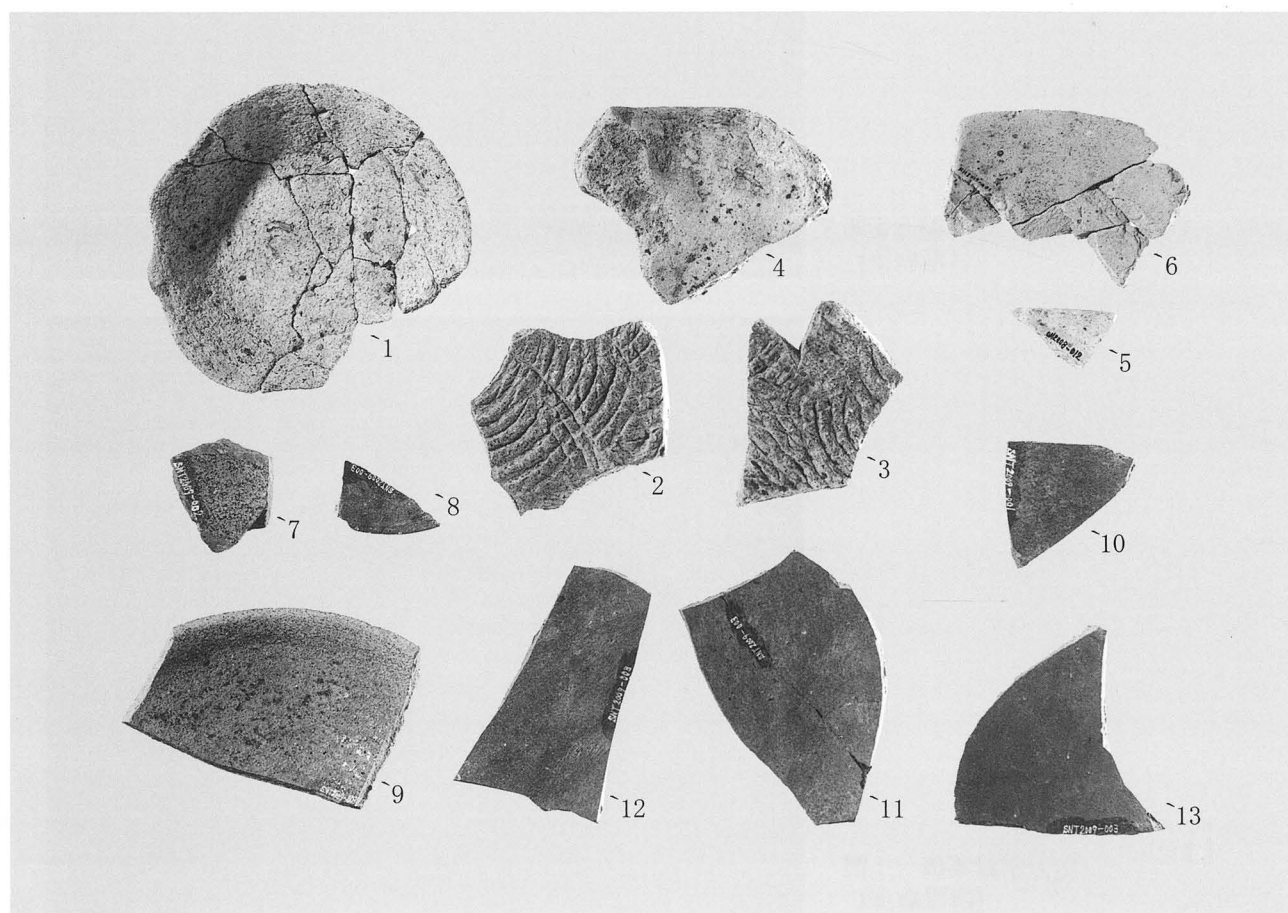


US 08-1 区
（南西から）





各調査区出土遺物



同上

報告書抄録

ふりがな	せんなんし いせきぐん はつくつちょうさほうこくしょ にじゅうなな							
書名	泉南市遺跡群発掘調査報告書 XXVII							
副書名	—							
巻次	27							
シリーズ名	泉南市文化財調査報告書							
シリーズ番号	50							
編著者名	石橋広和／岡 一彦／城野博文							
編集機関	泉南市教育委員会							
所在地	〒 590-0592 大阪府泉南市樽井 1 丁目 1 番 1 号 Tel. 072-483-2583							
発行年月日	2010 年 03 月 31 日							

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査積 面 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡					
おのさと 男里遺跡	おおさかふせんなんしおのさと 大阪府泉南市男里	27228	ON	34度21分41秒	135度15分30秒	09-1 200909	50	工場
						09-2 200910	8	個人住宅
						09-3 200912	3	個人住宅
						09-4 200906	20	個人住宅
						09-5 200912	4	電話通信
						08-9 200903	3	個人住宅
こうへいじ 光平寺跡	おおさかふせんなんしおのさと 大阪府泉南市男里	27228	KH	34度21分39秒	135度15分16秒	09-1 200907	5	個人住宅
はたしろ 幡代遺跡	おおさかふせんなんしはたしろ 大阪府泉南市幡代	27228	HT	34度21分20秒	135度16分00秒	09-1 200907	6	個人住宅
ながやま 長山遺跡	おおさかふせんなんしばば 大阪府泉南市馬場	27228	NG	34度21分42秒	135度15分54秒	08-1 200901	3	個人住宅
ぼうずいけ 坊主池遺跡	おおさかふせんなんししんぢちちば 大阪府泉南市信達市場	27228	BZ	34度22分20秒	135度16分37秒	09-1 200909	20	共同住宅
						09-2 200910	8	分譲住宅
						09-3 200910	15	宅地造成
おのしろ 大苗代遺跡	おおさかふせんなんししんぢちちおのしろ 大阪府泉南市信達大苗代	27228	ONS	34度22分24秒	135度17分30秒	09-1 200905	4	個人住宅
かいごいけ 海宮宮池遺跡	おおさかふせんなんししんぢちちおのしろ 大阪府泉南市信達大苗代	27228	KG	34度22分20秒	135度17分12秒	09-1 200911	5	電話通信
しもむら 下村遺跡	おおさかふせんなんししんげ 大阪府泉南市新家	27228	SM	34度22分34秒	135度17分39秒	09-1 200909	6	個人住宅
しもむら1ごうふん 下村1号墳	おおさかふせんなんししんげ 大阪府泉南市新家	27228	SMT-1	34度22分42秒	135度17分49秒	09-1 200908	4	宅地造成
しんげこふんぐん 新家古墳群	おおさかふせんなんししんげ 大阪府泉南市新家	27228	SNT	34度22分32秒	135度18分10秒	09-1 200904	426	宅地造成、老人ホーム
うさいだ 兎田遺跡	おおさかふせんなんしうさいだ 大阪府泉南市兎田	27228	US	34度22分36秒	135度18分27秒	09-1 200911	3	個人住宅
						08-1 200902	4	個人住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
男 里 遺 跡	09-1	集落	古代	溝、ピット	土師器
	09-2	集落	古墳	ピット	須恵器
	09-3				
	09-4		中世		土師質真蛸壺
	09-5				
	08-9		中世		土師器
光 平 寺 跡	09-1		中世		土師器
幡 代 遺 跡	09-1				
長 山 遺 跡	08-1				
坊主池遺跡	09-1				
	09-2				
	09-3				
大苗代遺跡	09-1				
海宮宮池遺跡	09-1				
下 村 遺 跡	09-1				
下村 1 号墳	09-1				
新家古墳群	09-1		古墳		須恵器 古墳の存在を示唆
兎 田 遺 跡	09-1				
	08-1				

泉南市遺跡群発掘調査報告書X X VII

泉南市文化財調査報告書 第 50 集

2010 年 3 月 31 日

編集・発行 大阪府泉南市教育委員会

泉南市樽井 1 丁目 1 番 1 号

Tel. 072-483-2583

印刷 有限会社 ヌノタ印刷工房

泉南市新家4509-4.1-205

Tel. 072-480-2760

